

廿日市市中山間地域まちづくりビジョン

(案)

～ はつかいち ちいと山 ぶち山 まちづくりビジョン ～
(さいき) (よしわ)



ちょうどいい、みつけた。

廿日市市

はつかいちし

市長挨拶を挿入

目 次

第Ⅰ部 ビジョンの基本的な考え方	1
1. ビジョンの概要.....	2
2. 国・県の中山間地域の状況.....	5
3. 廿日市市の中山間地域の状況.....	8
4. 中山間地域集落实態調査の結果.....	24
5. アンケート調査から見えてくること.....	25
6. 中山間地域まちづくり会議と円卓会議.....	28
7. 中山間地域の課題と潜在力.....	31
第Ⅱ部 基本構想	33
1. 2050年を見据えた10年後の将来像.....	34
2. 中山間地域のまちづくり施策の3つの柱.....	37
3. 中山間地域のまちづくり施策の3つの視点.....	38
4. 中山間地域のまちづくり施策の取組方針.....	39
5. ビジョンの施策体系.....	42
6. ビジョンの推進体制.....	44
資料編	45
1. 公立学校及び保育園等の生徒・児童数の推移.....	46
2. 産業活動の状況.....	49
3. 基盤施設等の状況.....	51

第 I 部 ビジョンの基本的な考え方

1. ビジョンの概要

(1) ビジョン策定のねらい

廿日市市は市域の約70%が中山間地域(佐伯・吉和地域)であり、この中で市民の約8%の9,065人が暮らし続けています。

全国の過疎地域では1960年代までは人口が増加傾向で推移したものの、1970年代以降は、転出超過にともない、人口減少が急激に進みました。

その後は、高齢化や少子化の進行もあり、死亡数が出生数を上回る自然減から人口減少が拡大したことで、人々の暮らしにも様々な影響を及ぼすこととなりました。

本市中山間地域においては、佐伯地域では2000(平成12)年、吉和地域については、1950(昭和25)年をピークに人口減少が続き、現在では無住化した集落も生じており、今後、更なる人口減少や集落の無住化により、地域の生活環境の機能低下が進むと予想されます。

このように厳しい状況に置かれた本市中山間地域の状況を把握するため、2024(令和6)年度に集落实態調査を実施しました。この調査では、年々進む少子高齢化による地域の担い手不足やコロナ禍に伴い、集落の集まりや行事も減少し、地域の活力の減退が進んでいることが明らかになりました。

一方で、中山間地域が多くを有する農地や森林は、国土保全、水源涵養、地球温暖化防止、生物多様性保全など様々な価値を有しており、2001(平成13)年に日本学術会議が示した農業の多面的価値は年間で8兆2,226億円、森林の多面的価値は年間70兆2,638億円と試算されており、本市の農地や森林の面積で換算すると、年間で1,200億円以上の価値を担っていることとなります。

また、本市中山間地域の水田面積710.2haから試算すると、水稻でおよそ3,550tの収穫を見込むことができ、近年の食料安全保障の観点から農地を守ることの価値はさらに高まっています。

誰もが将来にわたって中山間地域の価値を享受し、豊かに暮らしていくためには、みんなが中山間地域を守っていく必要があります。

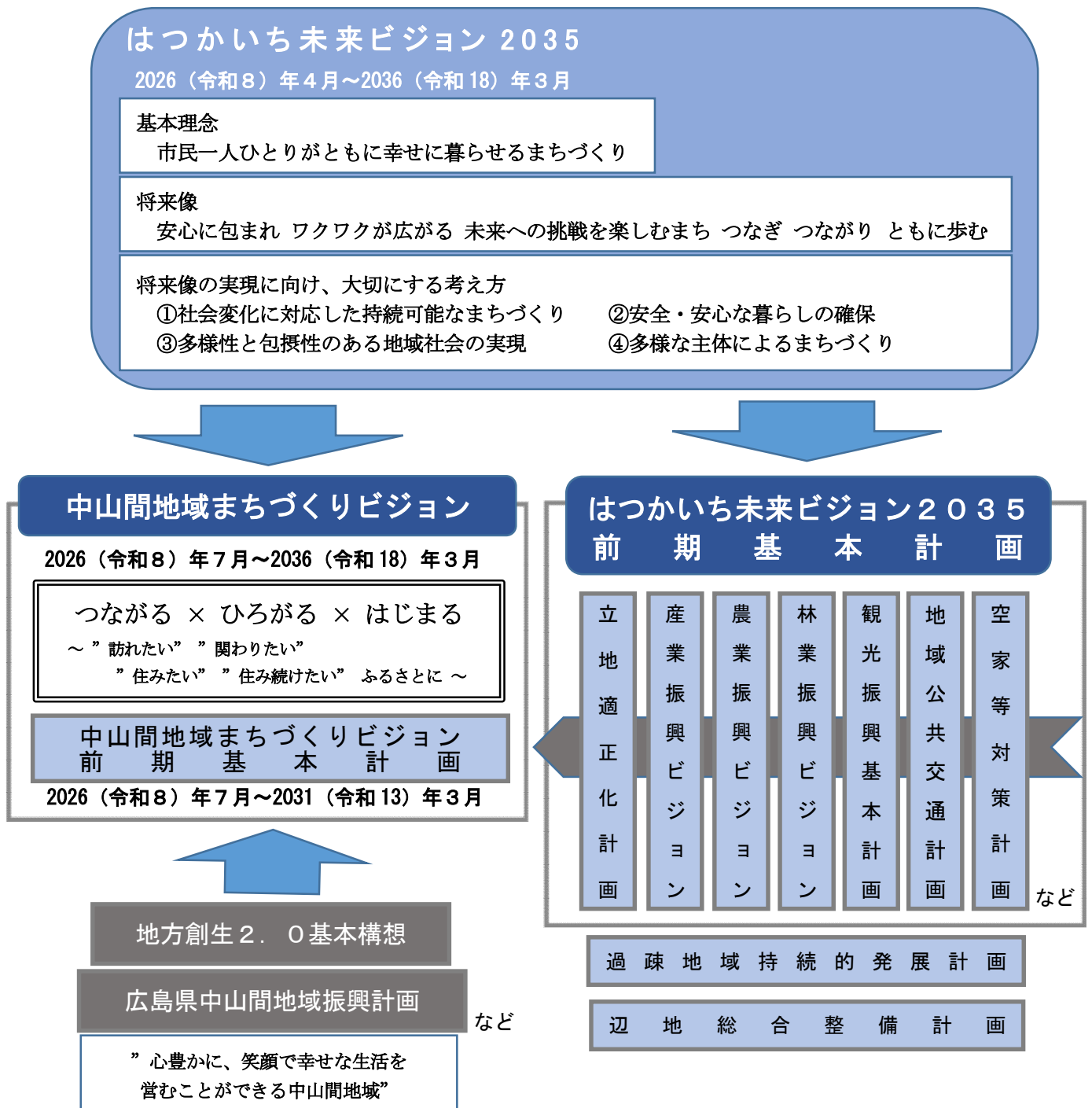
今後予想される人口減少を踏まえ、中山間地域で暮らし続けながら守ること、関わりながら守ることなど、様々な人がつながり、ともに中山間地域や集落のあるべき姿を考えていくことが求められています。

こうしたことから、25年先の2050年の中長期的な将来を見据えながら、目の前の10年間に取り組むべき方策を整理、実施していくことが必要なため、本市では、誰もが暮らし続ける、関わり続けることのできる中山間地域の実現を目指し、ビジョンの策定を行うこととします。

(2) ビジョンの位置づけ

廿日市市中山間地域まちづくりビジョン（以下「ビジョン」という。）は、はつかいち未来ビジョン2035（廿日市市総合計画）の中山間地域における戦略的な位置づけを担い、本市の中山間地域を取り巻く様々な状況を踏まえつつ、市民の主体的な活動を進めるとともに、市が行うべき施策を整理・実施し、豊かで持続的な中山間地域の実現を目指します。

また、各個別計画の中山間地域に係る部分を取りまとめるとともに、市民ニーズや集落の状況などの情報収集を行い、様々な取組を分野横断的に推進するための廿日市市中山間地域まちづくりビジョン前期基本計画についても策定します。



(3) ビジョンの対象地域

ビジョンの対象地域は、本市内陸部の佐伯地域と山間部の吉和地域の2地域とします。



(4) ビジョンの計画期間

ビジョンは2026（令和8）年度から2035（令和17）年度までの10年間とし、取組を示す基本計画を前期（2026（令和8）年度から2030（令和12）年度）と後期（2031（令和13）年度から2035（令和17）年度）の各5年間とします。

	2026 (R8)	2027 (R9)	2028 (R10)	2029 (R11)	2030 (R12)	2031 (R13)	2032 (R14)	2033 (R15)	2034 (R16)	2035 (R17)
計画期間	ビジョン（10年間）									
	前期基本計画（5年間）					後期基本計画（5年間）				

2. 国・県の中山間地域の状況

(1) 全国的な中山間地域の状況

全国的な中山間地域の現状を中山間地域の多くが含まれる過疎地域でみると、全国の市町村の51.5%にあたる885自治体が対象となっており、面積では63.2%を占めているにもかかわらず、人口については9.3%を占めるにとどまっています。

多くの過疎地域自治体では、若者が流出する転出超過による社会減での人口減少が進展してきましたが、2009（平成21）年以降では、自然減が社会減を上回るようになっており、それ以降、人口減少の流れはより急激に進んでいます。

過疎地域では、かつての基幹産業であった農林水産業が著しく衰退し、耕作放棄地の増加や森林の荒廃が進むとともに製造業などの新たな事業所の立地もほとんど望めない状況におかれ、地域社会の活力低下に加え、医師不足などの顕在化や高齢化と人口減少が同時に進行しており、多くの集落が消滅の危機に瀕している状況が見られます。

国においては、1970（昭和45）年以降時限立法により取り組んできた過疎対策について、2021（令和3）年に新たに過疎地域持続的発展特別措置法を制定し、財政、金融、税制等総合的な支援措置を講じつつ、地域の活性化に向けた取組を推進しています。

また、地方の持続的な発展を図るため、2014（平成26）年から進められてきた地方創生の取組は、開始から概ね10年が経過しましたが、この地方創生の成果は、地域によっては人口増加等をしているところもみられるものの、全国的には人口減少や東京圏への一極集中などの大きな流れを変えるには至っておらず、地方の厳しい状況は大きく改善していません。

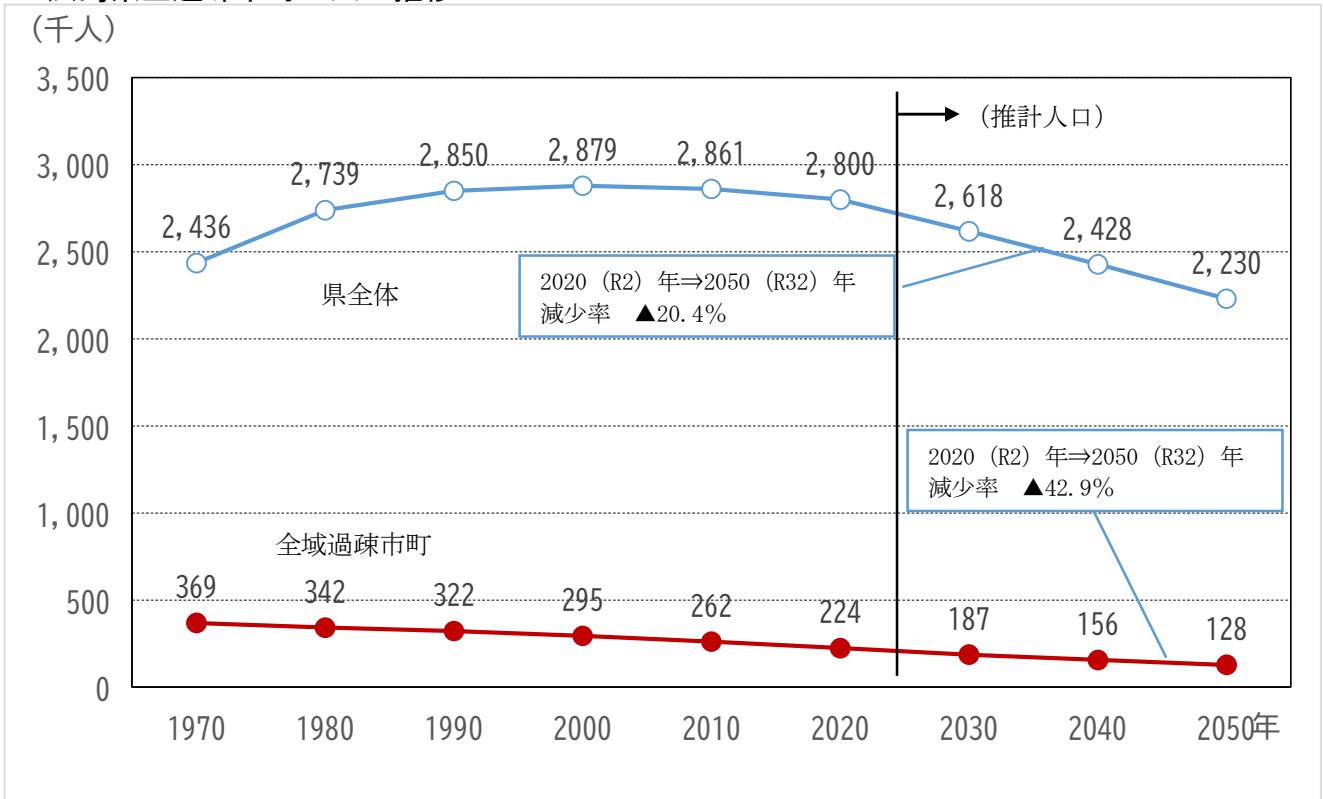
こうした状況を踏まえ、国では、人口減少を正面から受け止めた上で、すべての人が安心と安全を感じ、「新しく・楽しい」地方を実現するため、AI・デジタル技術の活用のための基盤整備や、交通・観光・関係人口の拡大など地域における社会課題について、官民で連携して対応を進めていくために「地方創生2.0基本構想」を2025（令和7）年6月に閣議決定しました。

この中で、「安心して働き、暮らせる地方の生活環境の創生」、「稼ぐ力を高め、付加価値創出型の新しい地方経済の創生～地方イノベーション創生構想～」、「新時代のインフラ整備とAI・デジタルなどの新技術の徹底活用」、「広域リージョン連携」を政策の5本柱として地方創生2.0を力強く展開するとしています。

令和7年12月に閣議決定された、「地方創生に関する総合戦略」では、「強い経済」、「豊かな生活環境」、「選ばれる地方」という目標を設定した上で、それを実現するための施策を具体化し、各施策との因果関係の整理を行い、進捗や成果を客観的かつ的確に把握できるKPIの設定等を行うなど、総合戦略全体の実効性を高めるよう取り組むとしています。

さらに、「強い経済」の実現に力点を置いた全体戦略としての「地域未来戦略」を令和8年夏を目処に取りまとめるとしています。

広島県全過疎市町の人口推移



資料：広島県「第Ⅱ期広島県中山間地域振興計画（集落対策の推進）」

		2020年 (令和2年)	2050年 (令和32年)	2020年-2050年 (令和2年- 令和32年)変化
全 県	人 口	280.0万人	223.0万人	▲20.4%
	高齢化率	29.4%	37.4%	+8.0pt
全域過疎 市 町	人 口	22.4万人	12.8万人	▲42.9%
	高齢化率	41.0%	48.5%	+7.5pt

資料：広島県「第Ⅱ期広島県中山間地域振興計画（集落対策の推進）」

集落数の変化

	2019年 (令和元年)	2050年 (令和32年)	2019年-2050年 (令和元年-令和32年) 変化
集落数	3,372	2,898	△474
9世帯以下集落数	379	1,346	+967

資料：広島県「第Ⅱ期広島県中山間地域振興計画（集落対策の推進）」

（集落数は農林業センサスの農業集落で算出）

3. 廿日市市の中山間地域の状況

(1) 中山間地域の現状

本市においても、中山間地域の高齢化と人口減少が同時に進み、2025（令和7）年10月現在では、佐伯地域の高齢化率は45.7%、吉和地域については49.4%で、2003（平成15）年から2025（令和7）年の人口減少率については、佐伯地域が33.3%、吉和地域は37.1%となっており、全国の過疎地域と同様に人口減少と高齢化が顕著であるといえます。

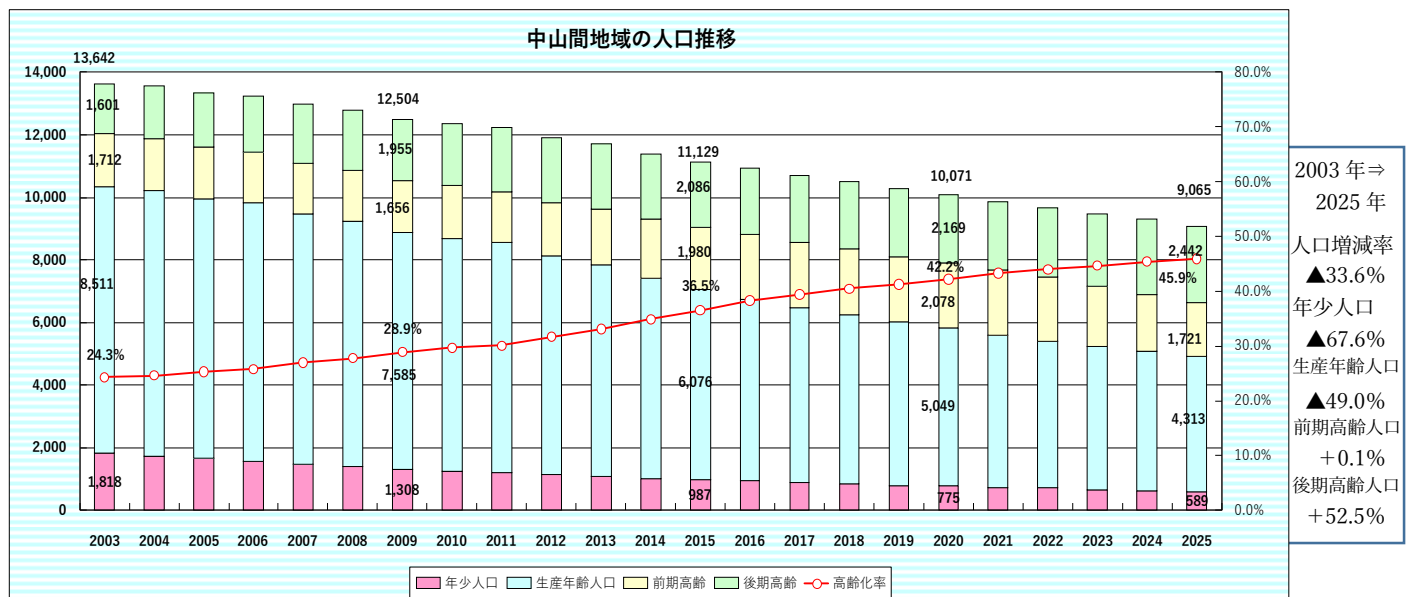
しかしながら、年度別の推移を見てみると、吉和地域の高齢化率は近年鈍化しており、また、両地域についても出生に比べて死亡が多いため自然減により人口が大きく減少しているものの、転入・転出による社会動態については、空き家バンクを始めとする移住・定住施策などにより、2023（令和5）年度は転入超過といった、田園回帰も一部みられます。

廿日市市の面積及び人口構成比

	単 位	廿日市市	うち中山間地域		
			佐伯地域	吉和地域	
面 積	実数(km ²)	489.48	340.58	194.83	145.75
	構成比(%)	—	69.6	39.8	29.8
人口 2003(平成15)年 10月1日	実数(人)	118,584	13,642	12,783	859
	構成比(%)	—	11.5	10.8	0.7
人口 2025(令和7)年 10月1日	実数(人)	114,715	9,065	8,525	540
	構成比(%)	—	7.9	7.4	0.5

資料：住民基本台帳、廿日市市統計書

(2) 人口減少と高齢化の進行

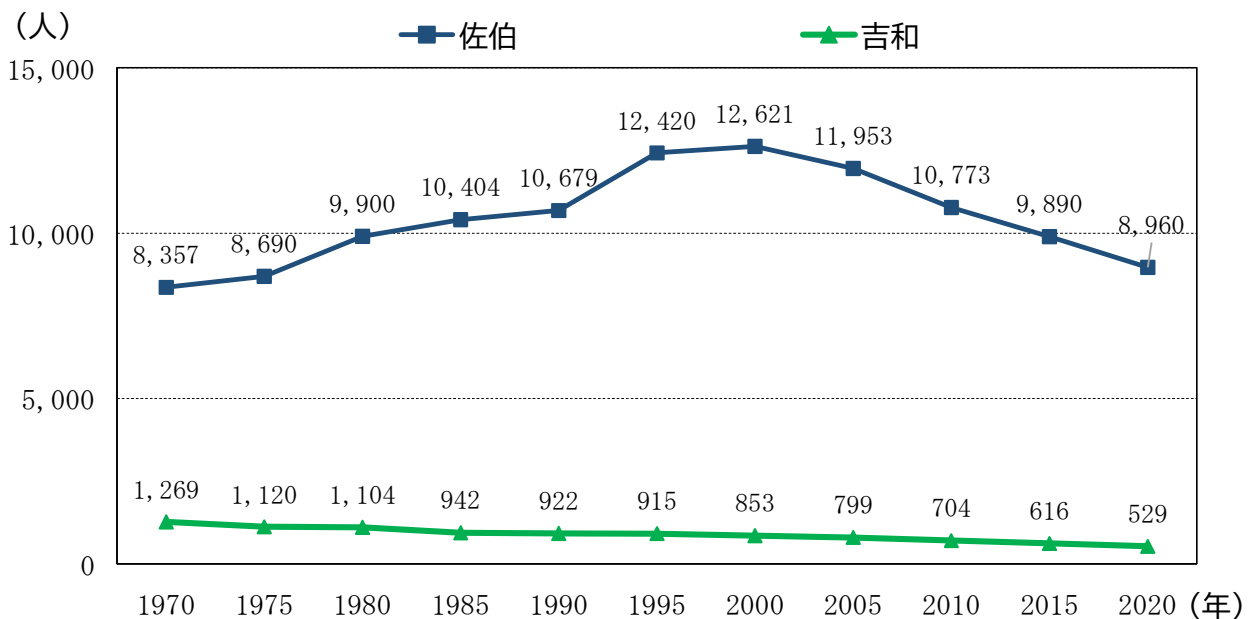
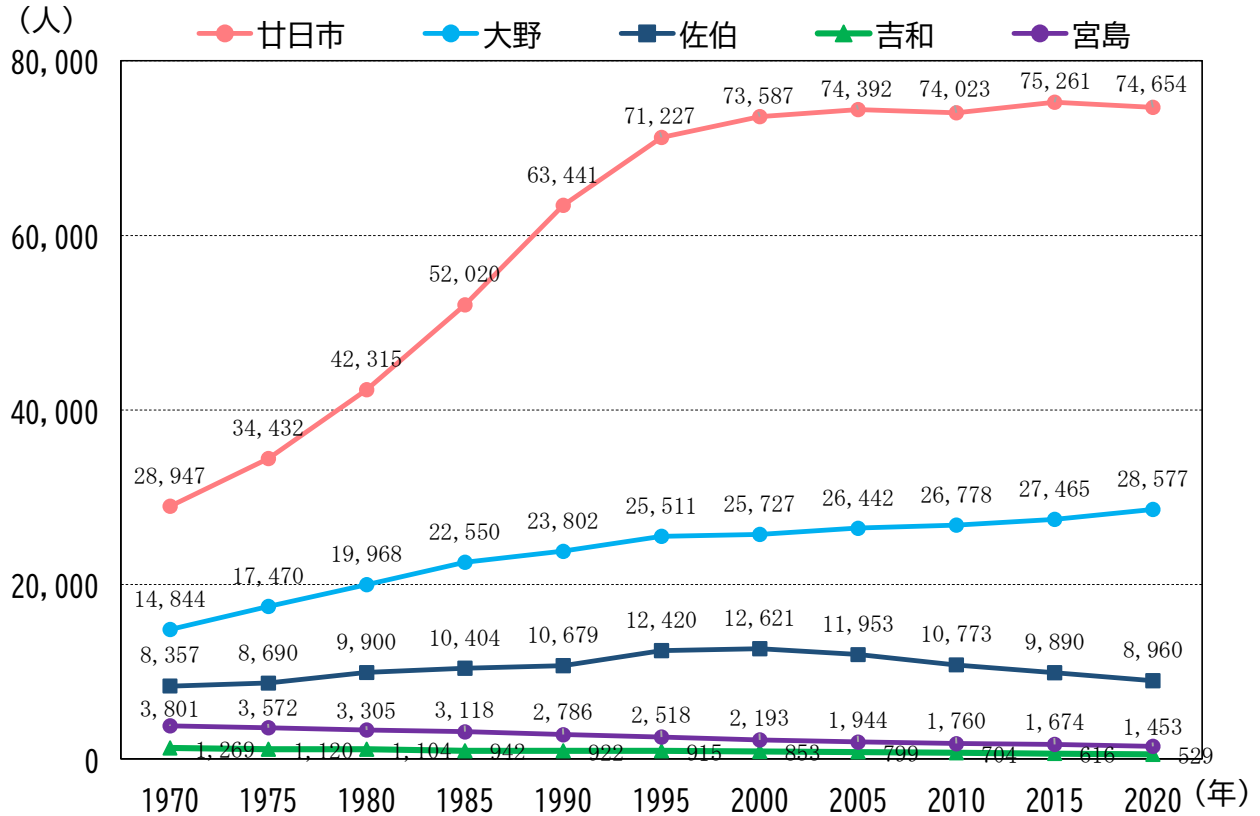


資料：住民基本台帳（各年10月1日現在）

(3) 地域別人口の状況

本市の地域別人口の推移を国勢調査データからみると、中山間地域の佐伯地域は2000（平成12）年以降、減少傾向で推移しており、吉和地域は1970（昭和45）年以前から、減少が続いています。

そのほかの地域をみると、地域差が大きく、廿日市地域は2000（平成12）年まで大幅に増加してきましたが、近年横ばいで推移しています。大野地域は1970（昭和45）年以前から、増加を続け、宮島地域は1970（昭和45）年以前から、減少が続いています。



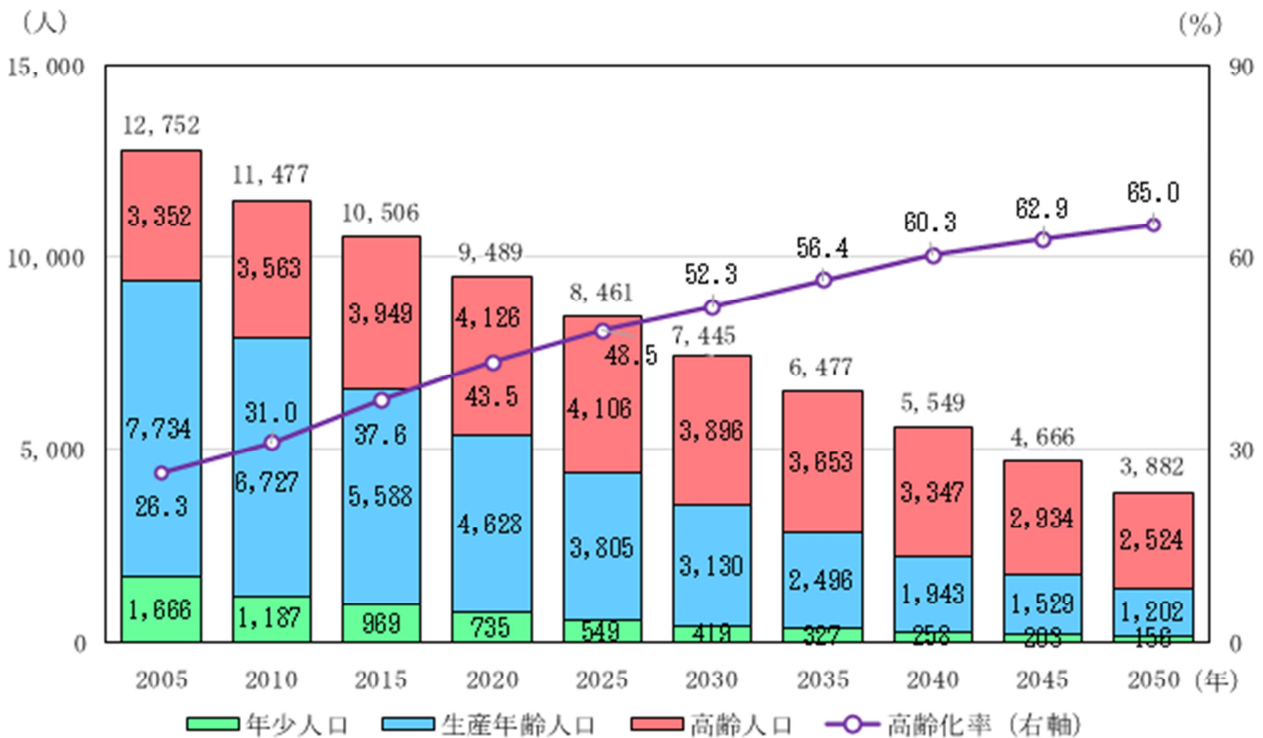
資料：総務省「国勢調査」

(4) 将来人口推計

国勢調査人口を基に、生残率、こども女性比及び0～4歳性比については国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口令和5（2023）年推計」の廿日市市仮定値等からコーホート要因法により、本市中山間地域の将来人口を推計してみると、2035（令和17）年にかけて5年毎に1,000人前後の人口減少が続き、2045（令和27）年には、5,000人を割り込み、2050（令和32）年には4,000人を割り込むことが見込まれます。

年齢構成でみると、年少人口（0～14歳）は2030（令和12）年に500人を割り込み、生産年齢人口（15～64歳）は2040（令和22）年に2,000人を割り込むなど、減少が続きます。高齢人口（65歳以上）についても2020（令和2）年をピークに減少することが見込まれるものの、高齢化率は上昇を続け、2040（令和22）年に60%を超え、2050（令和32）年には65.0%まで上昇することが見込まれます。

【図 中山間地域（佐伯・吉和）の将来人口の推移】



- (注) 1. 2005（平成17）～2020（令和2）年は国勢調査の実績値。2025（令和7）年以降は推計値。
 2. コーホート要因法により、佐伯地域、吉和地域を推計し、その合計値を示す。
 3. 推計に用いる生残率、こども女性比、0～4歳性比は国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口 令和5（2023）年推計」の廿日市市仮定値を準用した。
 4. 男女・5歳階級別純移動率については、2005（平成17）～2020（令和2）年の5年毎の純移動率の平均を用いた。

資料：総務省「国勢調査」

地域別にみると、佐伯地域は、2045（令和 27）年に 5,000 人を割り込み、2050（令和 32）年には 3,700 人となることを見込まれます。

吉和地域は、2040（令和 22）年に 300 人、2050（令和 32）年には 200 人を割り込むことを見込まれます。

図 【中山間地域（佐伯地域）の将来人口の推移】

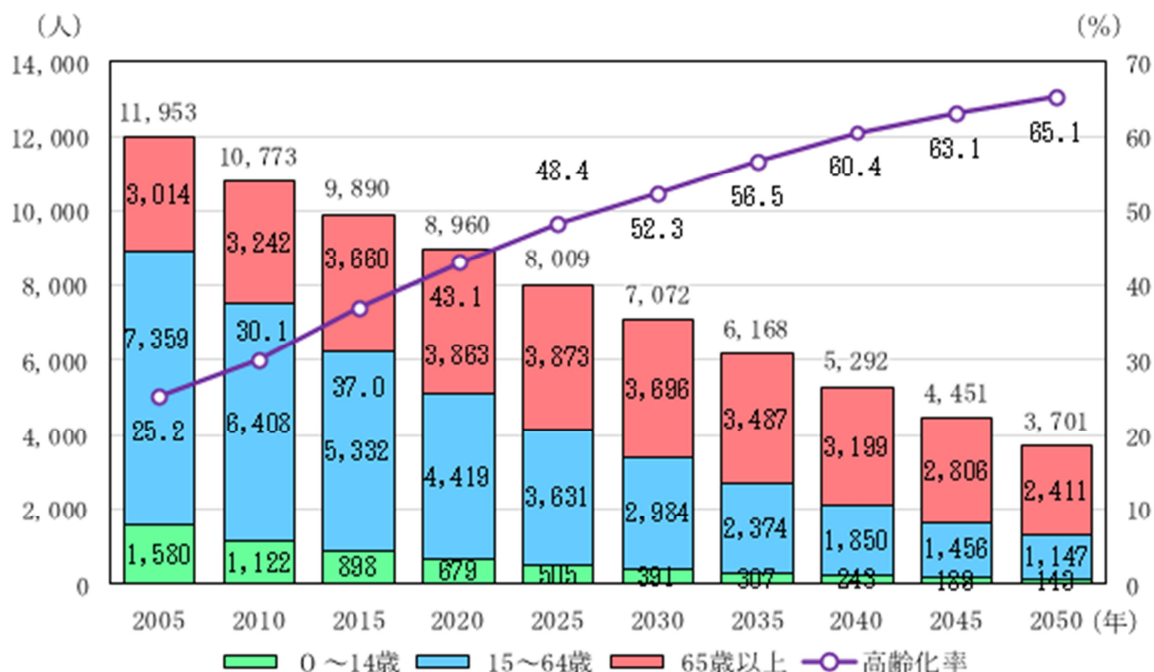
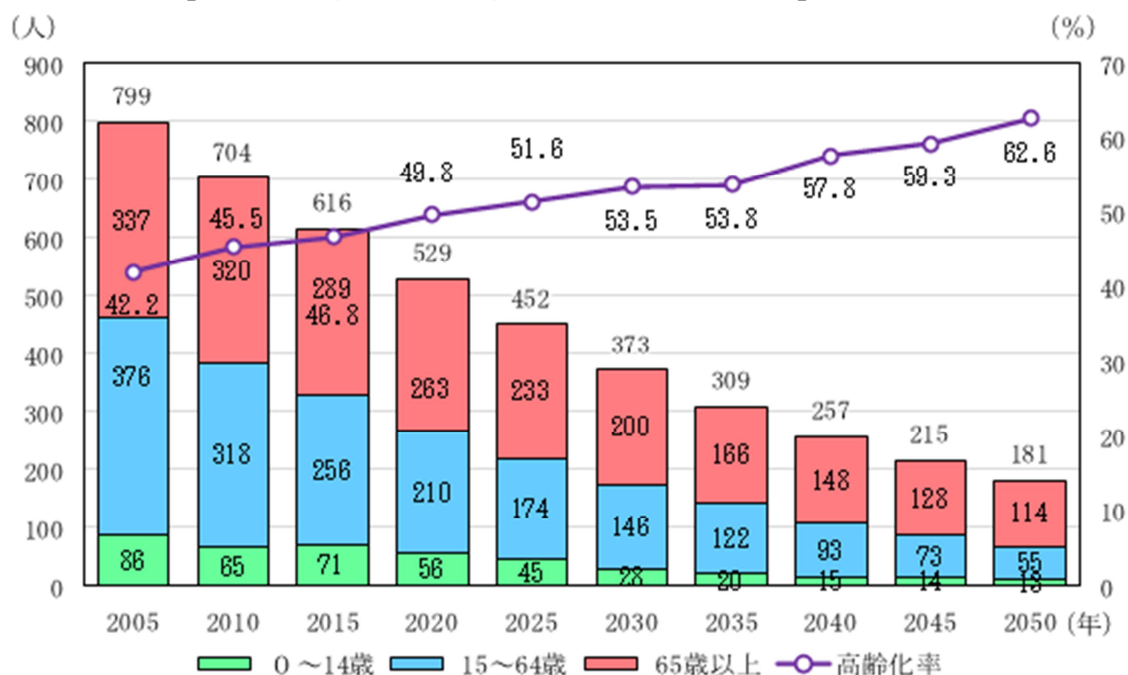


図 【中山間地域（吉和地域）の将来人口の推移】

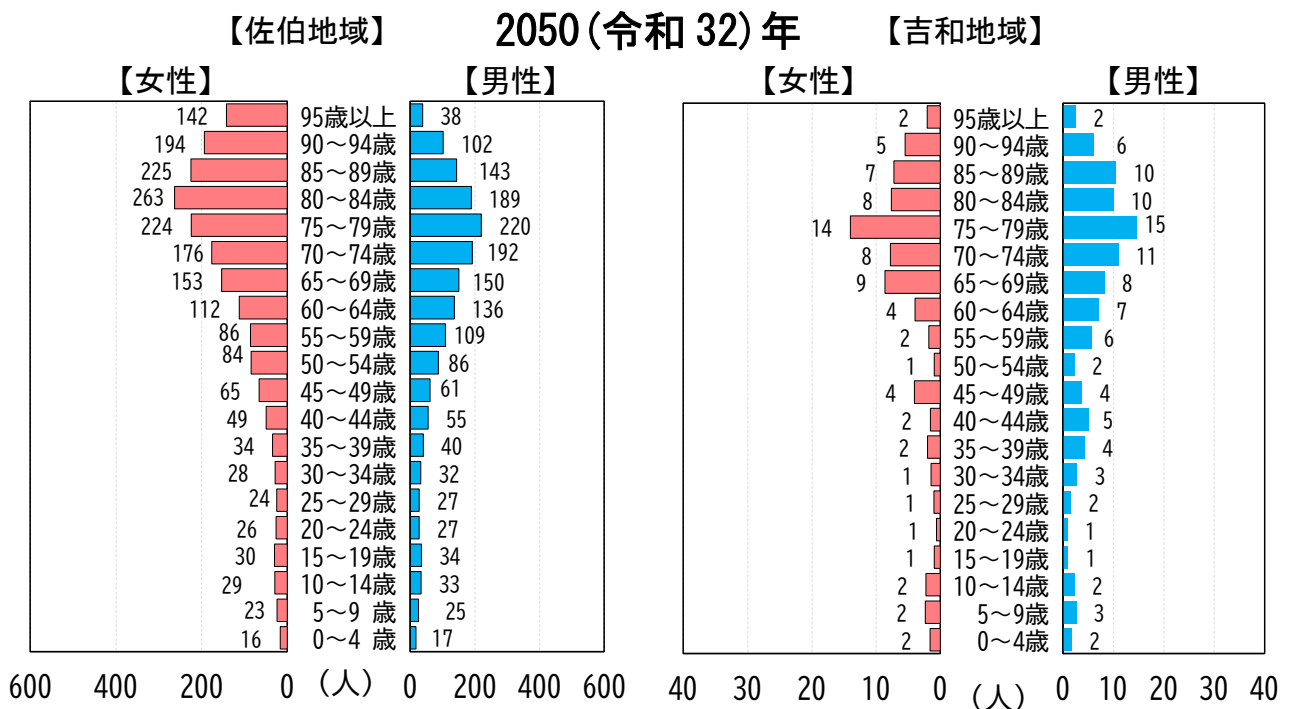
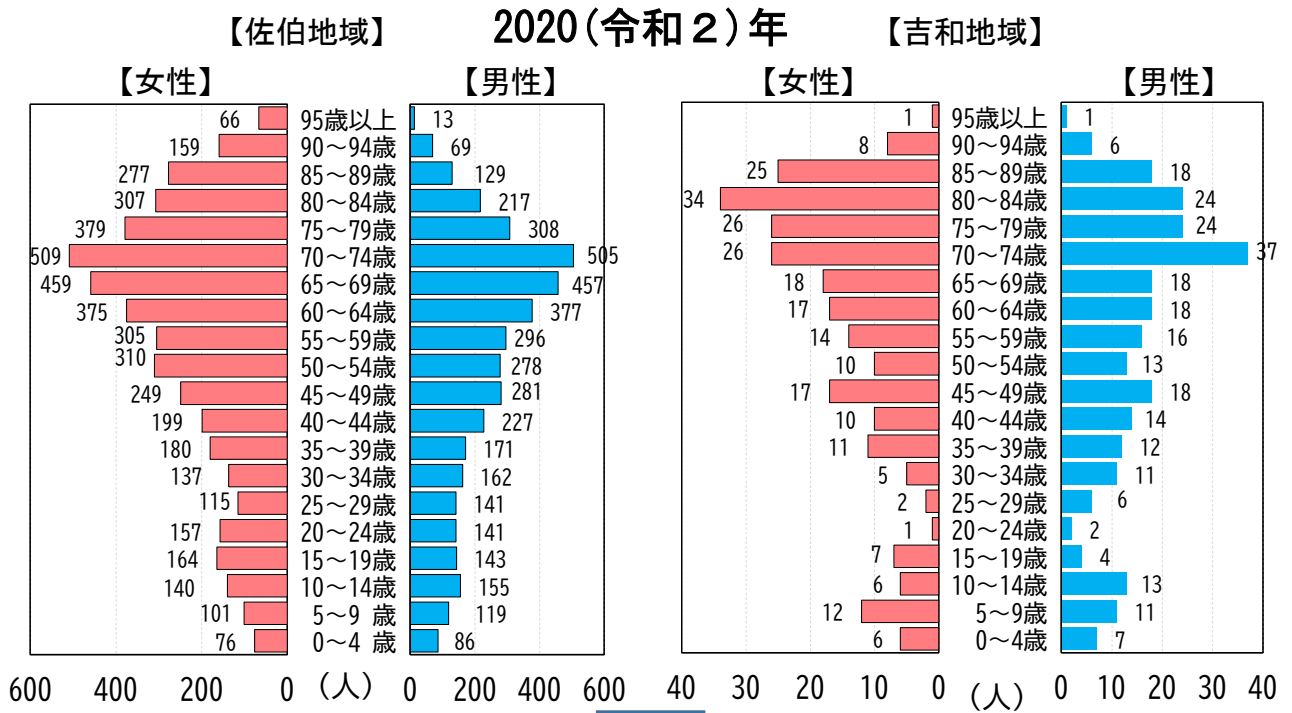


（注）2005（平成 17）～2020（令和 2）年は国勢調査の実績値。2025（令和 7）年以降は推計値。
資料：総務省「国勢調査」

(5) 年齢別人口構成の変化

佐伯地域、吉和地域の年齢別人口構成をみると、2020（令和2）年は佐伯・吉和地域ともに団塊の世代（70～74歳）が最も多くなっています。吉和地域は15～19歳が20～24歳に移行する際に転出する傾向が強いため、20～24歳が非常に少なくなる傾向がみられます。

2050（令和32）年をみると、団塊ジュニア世代前後（75～79歳・80～84歳）が最も多くなっており、30歳代以下の人口が大きく減少することが見込まれます。



資料：総務省「国勢調査」

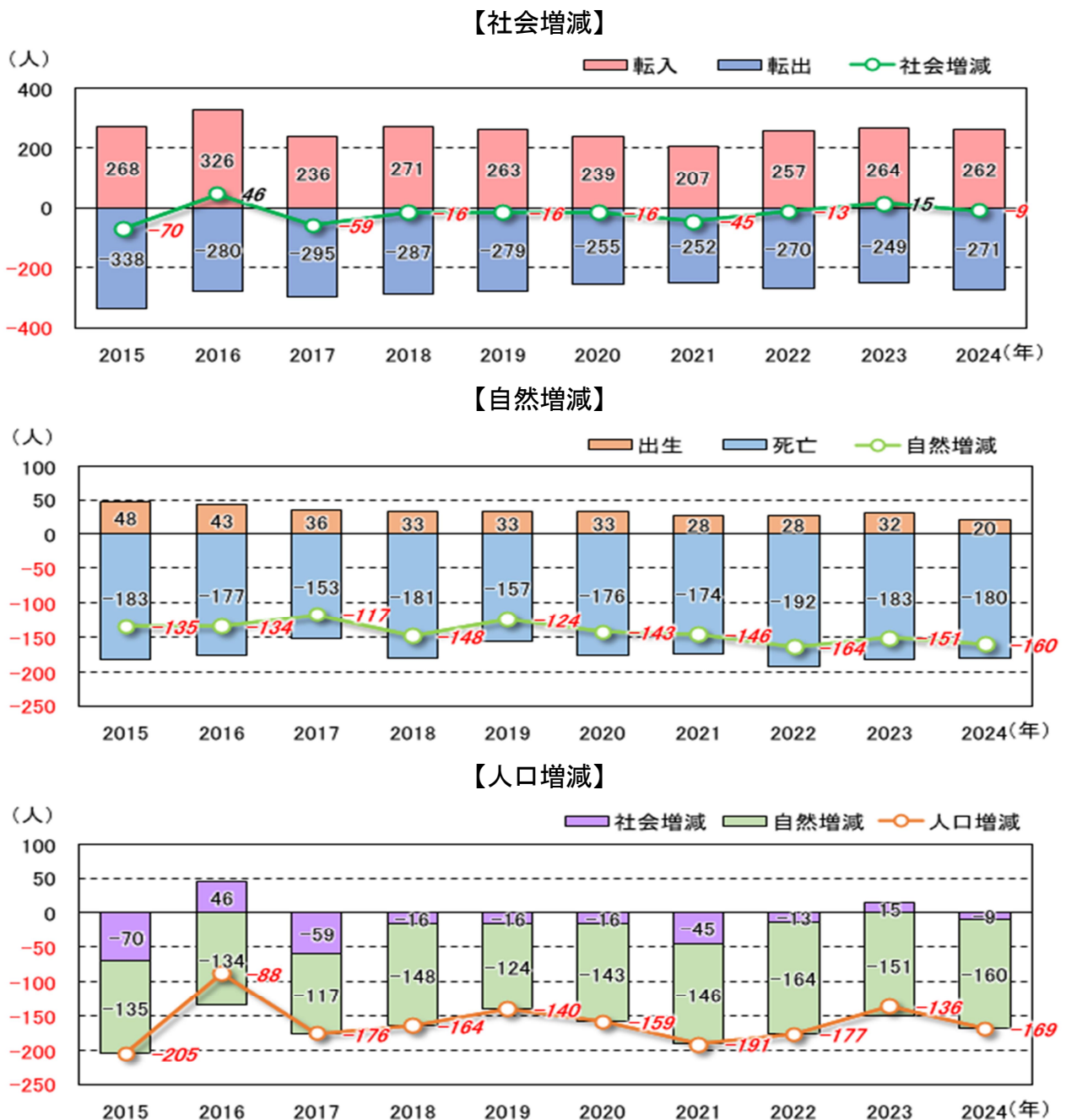
(6) 人口動態

中山間地域（佐伯・吉和）の人口動態を社会増減（転入と転出の差）と自然増減（出生と死亡の差）に分解してみると、社会増減では2016（平成28）年度と2023（令和5）年度に転入超過となり社会増を達成しており、その他の年次も転出超過幅は小さく、社会増減に関しては均衡化しつつあります。

一方、自然増減では、死亡数が200人弱であるのに対し、出生数は30人前後で推移しているため、150人前後の自然減で推移しています。

このため、本市の中山間地域の人口動態は自然減を主因とした人口減少が継続していることがわかります。

図 中山間地域（佐伯・吉和）の人口動態

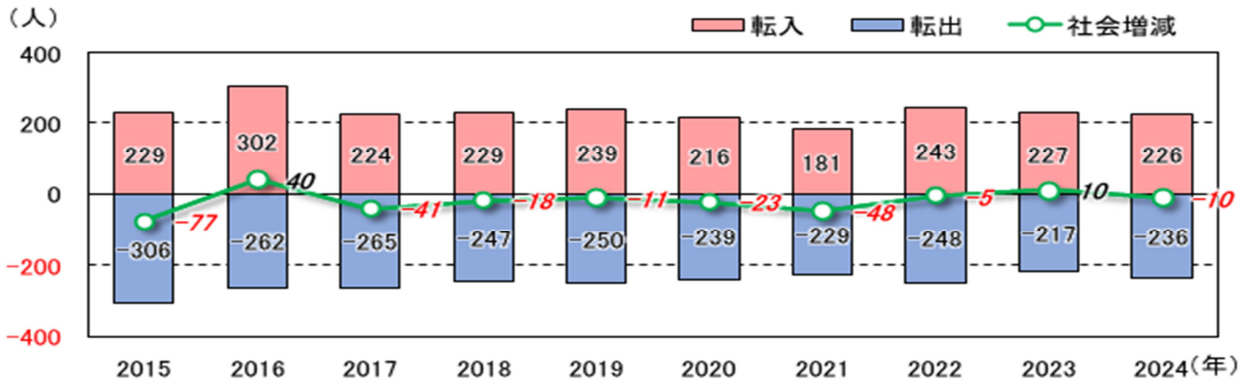


資料：廿日市市「住民基本台帳」

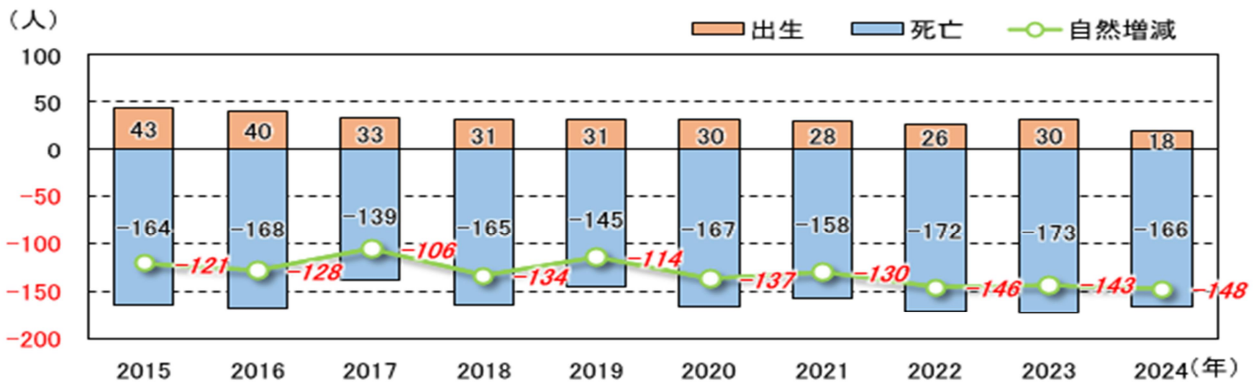
佐伯地域は、社会増減では2016（平成28）年度と2023（令和5）年度に転入超過となり社会増を達成しており、その他の年次も転出超過幅は小さく、社会増減に関しては均衡化しつつあります。

一方、自然増減では、死亡数が160人前後であるのに対し、出生数は30人前後で推移しているため、130人前後の自然減で推移しています。

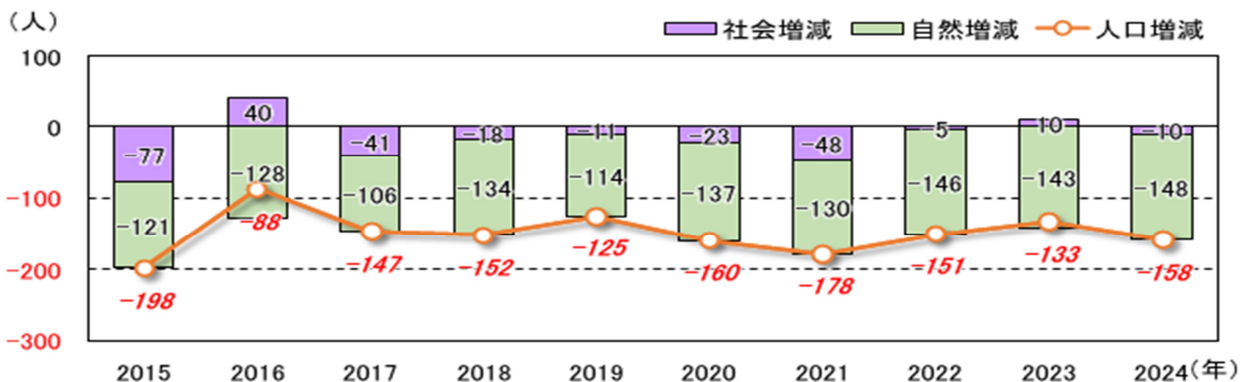
図 佐伯地域の人口動態
【社会増減】



【自然増減】



【人口増減】

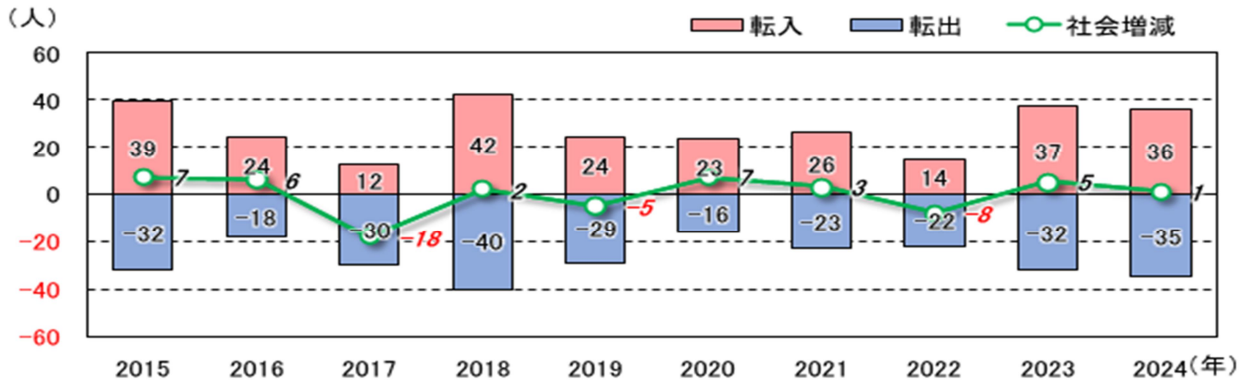


資料：廿日市市「住民基本台帳」

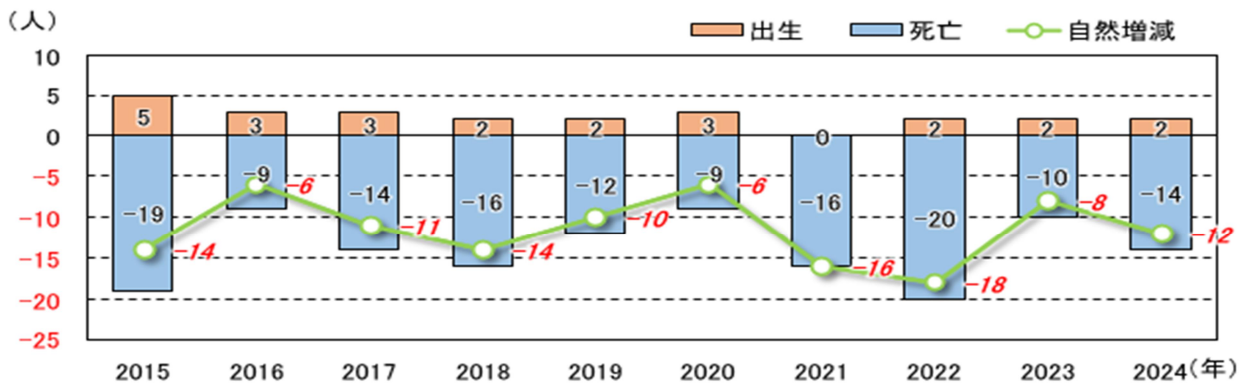
吉和地域は、社会増減では2017（平成29）年度と2019（令和元）年度、2022（令和2）年度を除いて転入超過となっており、社会増傾向で推移しています。

一方、自然増減では、死亡数が20人弱に対し、出生数は5人以下で推移しているため、15人前後の自然減で推移しています。

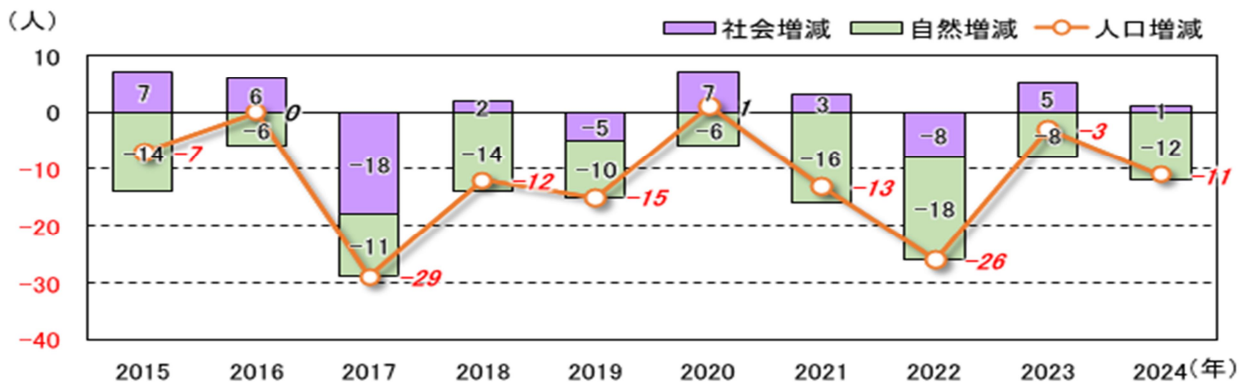
図 吉和地域の人口動態
【社会増減】



【自然増減】



【人口増減】



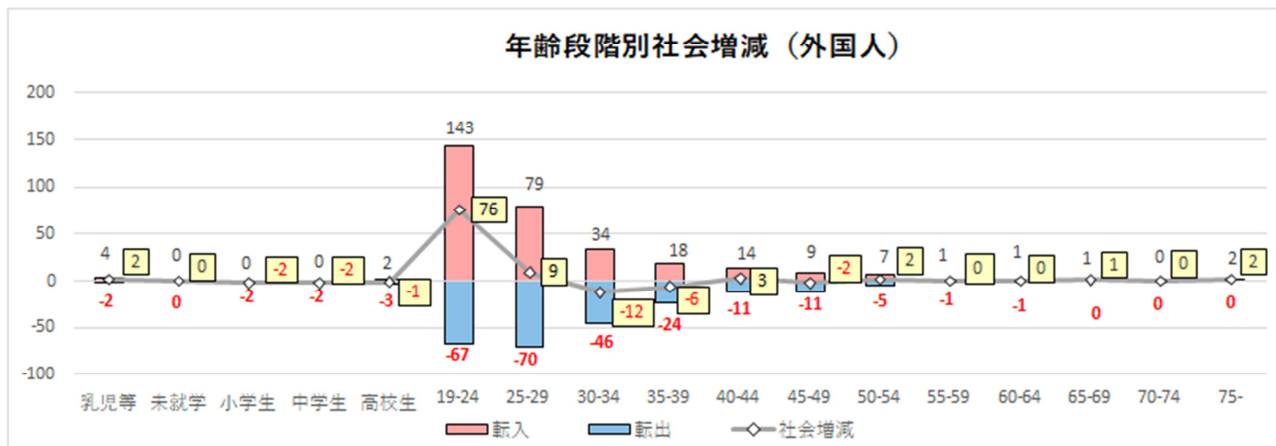
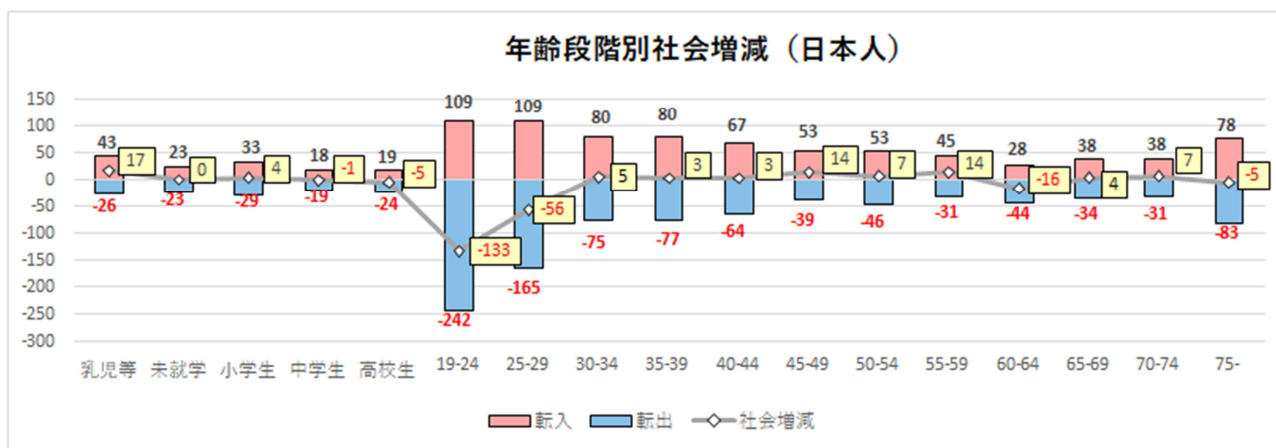
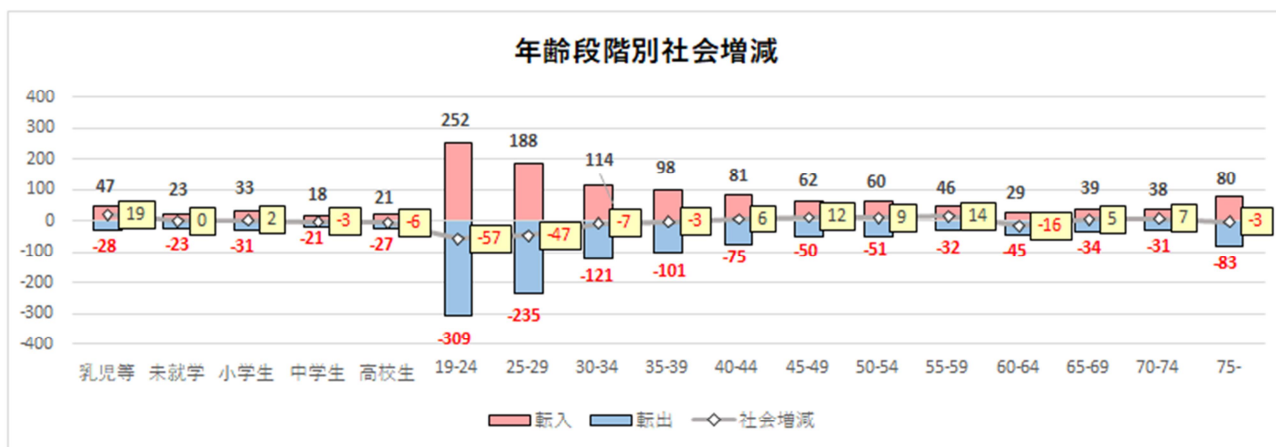
資料：廿日市市「住民基本台帳」

(7) 年齢別社会増減

年齢別社会増減数を2020（令和2）年度から2024（令和6）年度の5年間合計値による推移をみると、「19-24歳」で転出超過が最も大きく、これに「25-29歳」が続き、転入超過では、「乳児等」、「小学生」、「40-59歳」が目立ちます。

日本人では「19-29歳」の転出超過が目立っているものの、「乳児等」、「小学生」、「30-59歳」、「65-74歳」で転入超過となっています。

また、外国人では主な転出入は「19-49歳」となっています。

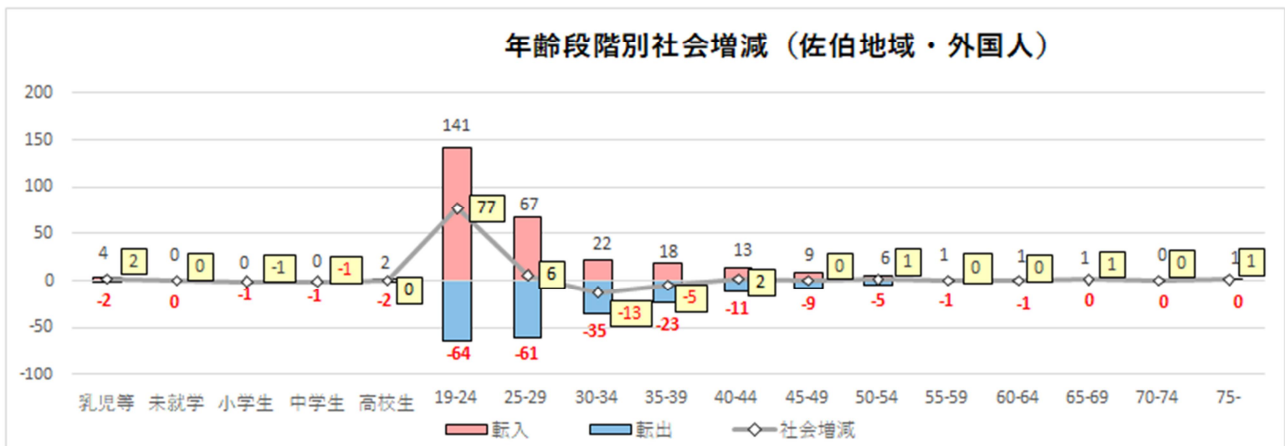
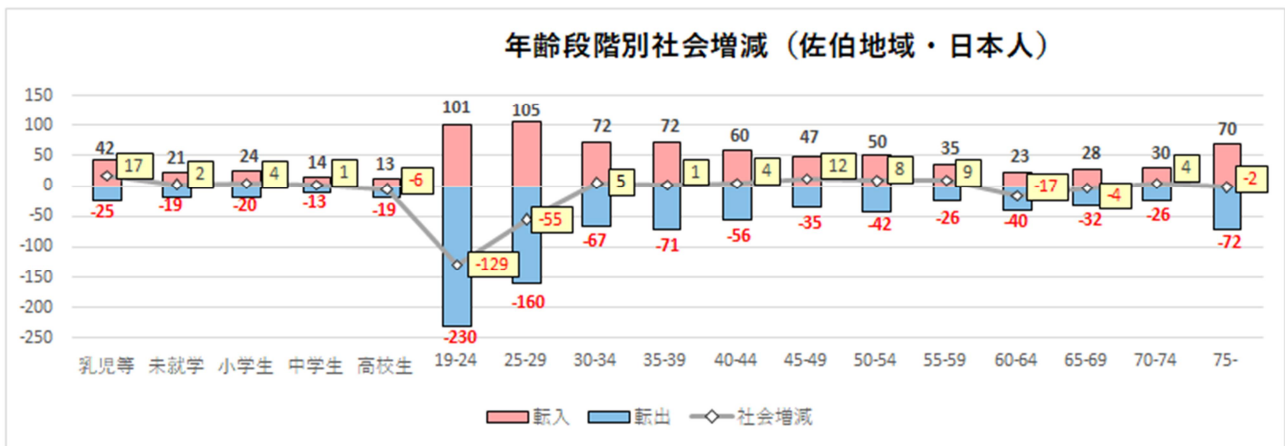
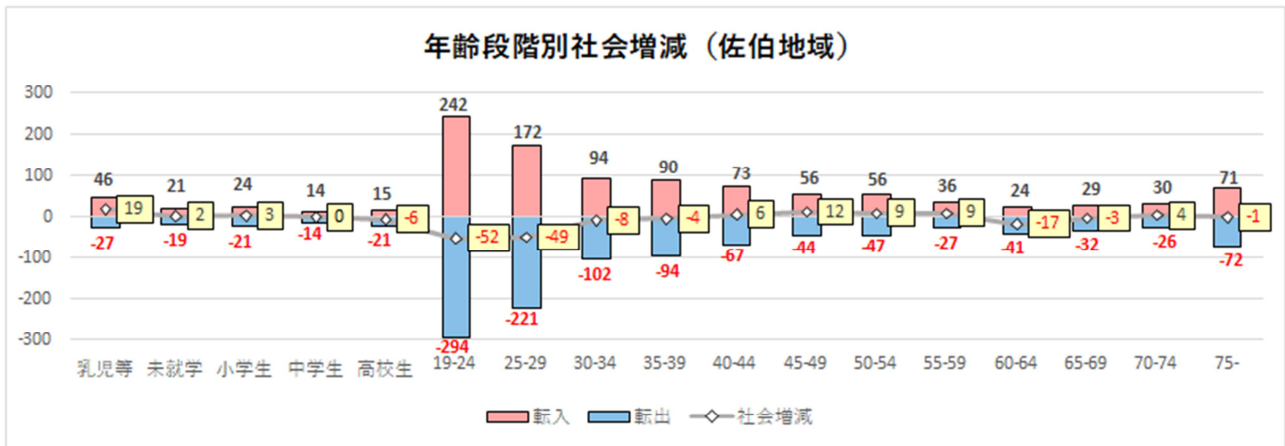


資料：廿日市市「住民基本台帳」 乳児等は0-2歳児、未就学は3-5歳児を表しています。

佐伯地域の年齢別社会増減では、中山間地域全体と同様に「19-24歳」で転出超過が最も大きく、これに「25-29歳」が続き、転入超過では、「乳児等」、「未就学」、「小学生」、「40-59歳」が目立ちます。

日本人では「19-29歳」の転出超過が目立っているものの、「乳児等」、「未就学」、「小学生」、「中学生」と「30-59歳」、「70-74歳」で転入超過となっています。

また、外国人では中山間地域全体とほぼ同様に主な転出入は「19-44歳」となっています。

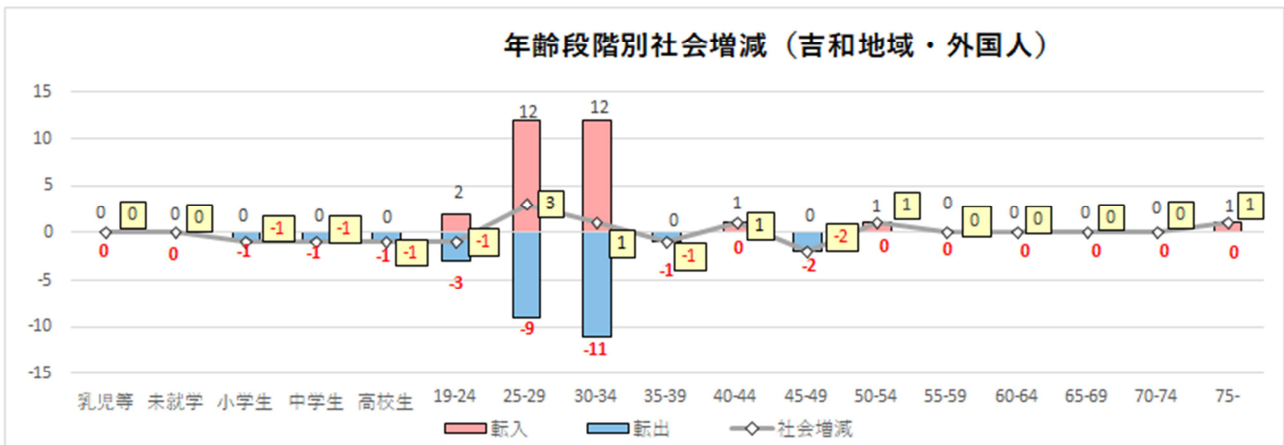
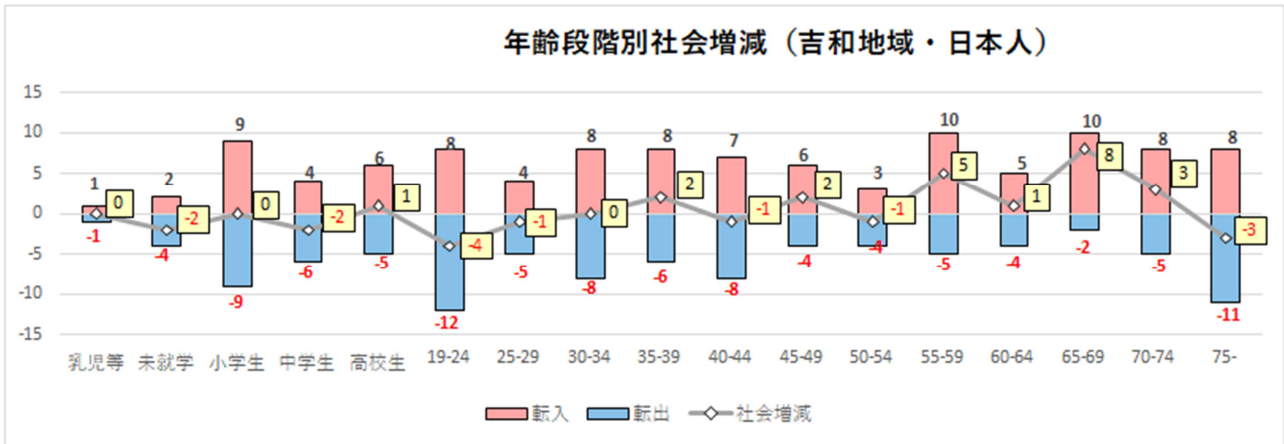
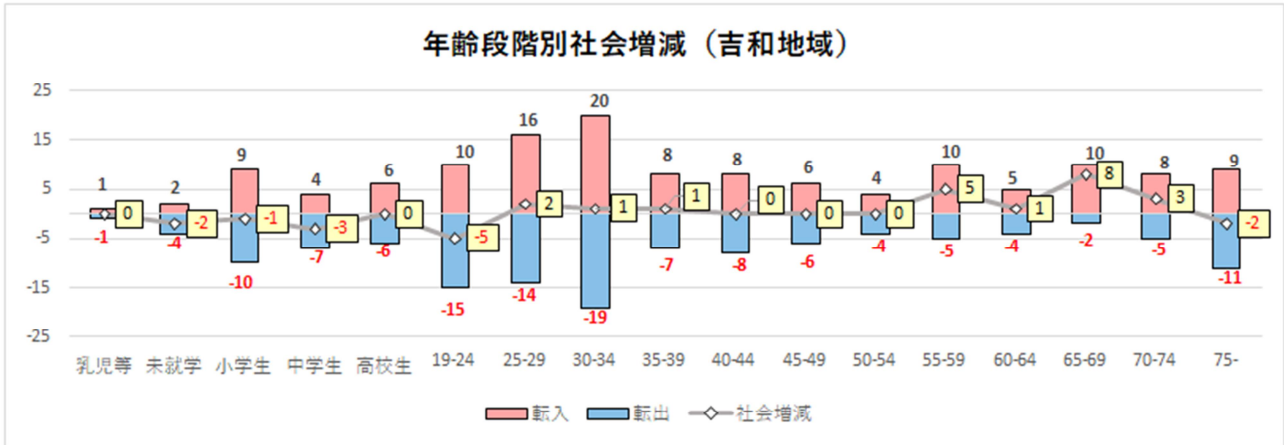


資料：廿日市市「住民基本台帳」 乳児等は0-2歳児、未就学は3-5歳児を表しています。

吉和地域の年齢別社会増減では、「19-24歳」で転出超過が最も大きく、これに「中学生」、「未就学」が続き、「25-39歳」、「55-74歳」が転入超過となっています。

日本人では、「19-24歳」で転出超過が最も多く、続いて「75歳以上」、「未就学」、「中学生」となっており、「高校生」と「35-39歳」、「45-49」、「55-74歳」では、転入超過となっています。

また、外国人では、転出入とも「25-34歳」の割合が最も高くなっています。



資料：廿日市市「住民基本台帳」 乳児等は0-2歳児、未就学は3-5歳児を表しています。

(8) コミュニティの状況

佐伯地域では、玖島地区コミュニティ推進協議会、友和地区自治会等連絡協議会、津田・四和ふれあいまちづくりの会、浅原の未来を創る会、吉和地域では、コミュニティよしわが地域自治活動を行っています。

それぞれの組織においてコミュニティプランを作成し、地域の団体や町内会等の組織と連携するなどして、まちづくり活動を行っていますが、少子化高齢化や人口減少にともなう担い手不足など、人材の確保には苦慮している状況です。

こうした中、生活拠点となる玖島地区では玖島地区コミュニティ推進協議会が玖島の里づくり交流拠点施設（旧玖島小学校）の運営を受託し、カフェや産直市など自主事業を行っています。

同じく生活拠点である浅原地区では浅原の未来を創る会の実行組織として特定非営利活動法人NPOあさはらを設立し、中央活性化センター（旧浅原市民センター）や交流会館などからなる、あさはらまちづくり交流センターの指定管理を受けるとともに、カフェや産直の自主事業のほか、無人店舗の運営支援を行っています。

吉和地域においては、吉和支所と市民センターや歴史民俗資料館などの複合施設である吉和ふれあい交流センターの指定管理をコミュニティよしわがが受け、にぎわいや交流の場づくりなどを行っています。

表 コミュニティごとの人口等

単位：人

	中山間地域						廿日市市
	玖島	友和	津田・四和	浅原	吉和		
人口	9,065	747	5,015	2,276	487	540	114,715
年少人口	589	37	387	106	16	43	14,488
	6.5%	5.0%	7.7%	4.7%	3.3%	8.0%	12.7%
生産年齢人口	4,313	326	2,511	1,034	212	230	63,568
	47.6%	43.6%	50.1%	45.4%	43.5%	42.6%	55.4%
前期高齢人口	1,721	163	914	460	100	84	15,743
	19.0%	21.8%	18.2%	20.2%	20.5%	15.5%	13.7%
後期高齢人口	2,442	221	1,203	676	159	183	20,916
	26.9%	29.6%	24.0%	29.7%	32.7%	33.9%	18.2%

資料：廿日市市「住民基本台帳」令和7年10月1日時点

※各人口の上段が人数、下段が総人口における構成比

(9) 集落数の変化

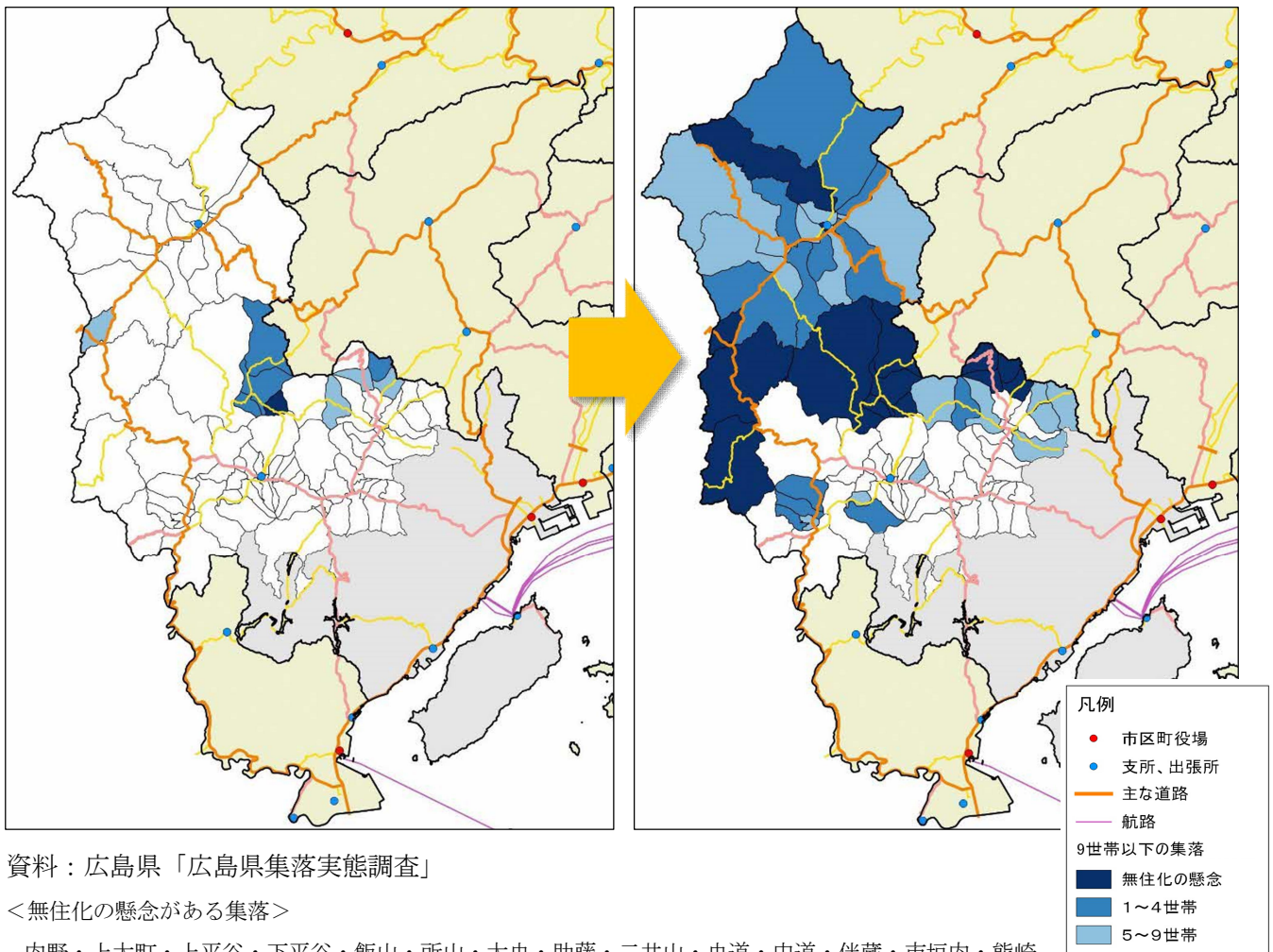
集落の推移をみると、2019（令和元）年から2050（令和32）年の間に13の集落が減少することが見込まれるとともに9世帯以下の集落数は8集落から28集落まで増加することが見込まれます。

		各地区の集落数					広島県
		玖島	友和	津田・四和	浅原	吉和	
2010年 (平成22年)	78 (8)	15 (3)	15 (0)	24 (4)	8 (0)	16 (1)	3,378 (325)
2019年 (令和元年)	77 (8)	15 (4)	15 (0)	23 (3)	8 (0)	16 (1)	3,372 (379)
2050年 (令和32年)	64 (28)	11 (7)	15 (0)	17 (3)	8 (5)	13 (13)	2,898 (1,346)
2019年と 2050年の比較	△13(20)	△4 (3)	0 (0)	△6 (0)	0 (5)	△3 (12)	△474 (967)

(注)：()内は9世帯以下集落数

資料：広島県「広島県集落实態調査」(集落数は農林業センサスの農業集落で算出)

図 9世帯以下集落の推移
【2019（令和元）年】 【2050（令和32）年】

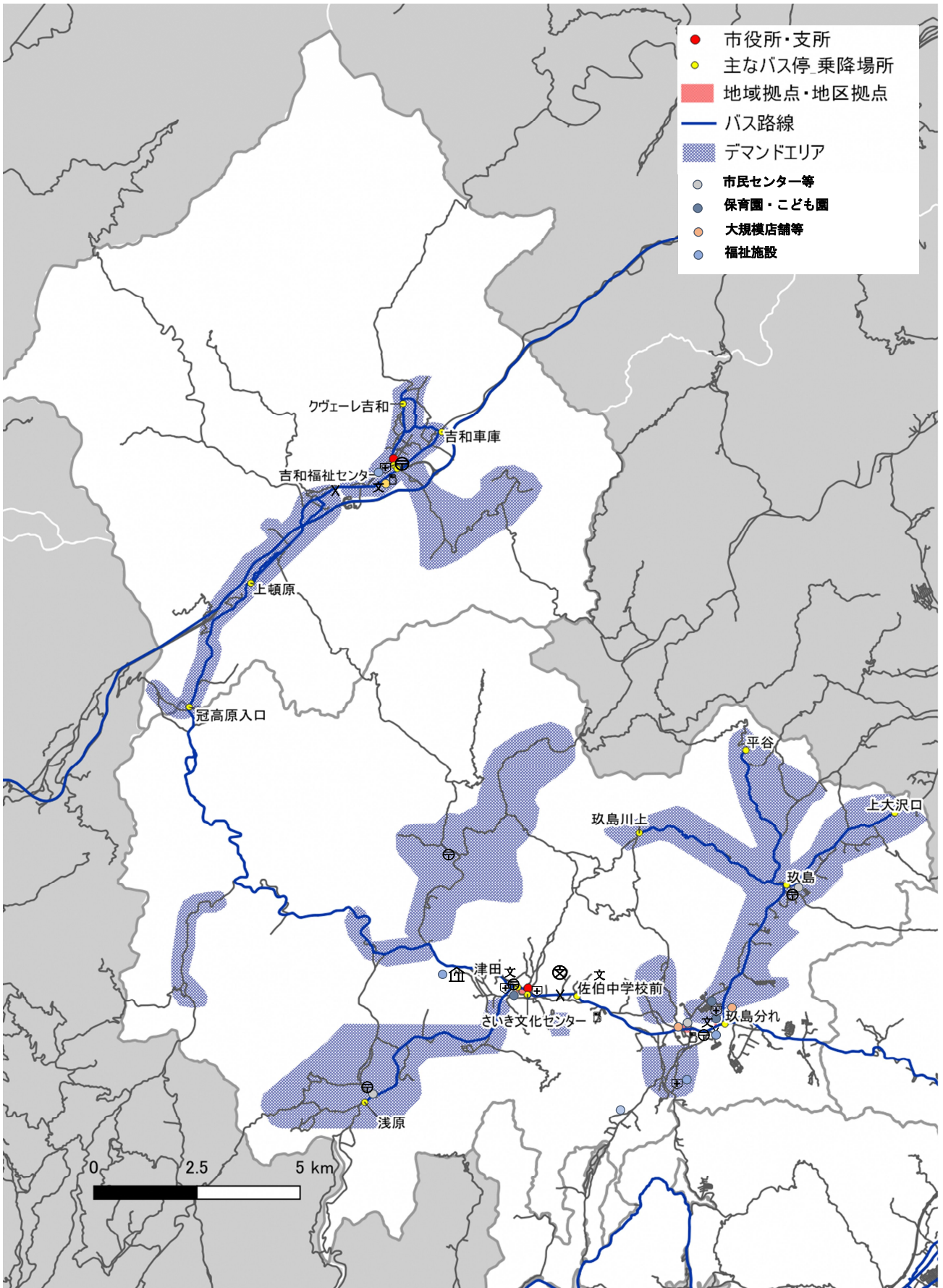


資料：広島県「広島県集落实態調査」

<無住化の懸念がある集落>

内野・上大町・上平谷・下平谷・飯山・所山・大虫・助藤・二井山・虫道・中道・伴蔵・市垣内・熊崎

(10) 中山間地域の各種施設



(11) 産業活動の状況

中山間地域の産業活動をみると、事業所数は減少傾向にあるものの、従業者数は2012（平成24）年から2016（平成28）年にかけて増加し、2016（平成28）年から2021（令和3）年にかけては微減となっており、一定の事業所集積があり、就業先も確保されています。

ただし、今後の生産年齢人口（15～64歳）の減少が見込まれることから、地域産業の担い手を確保していくことが大きな課題になることが予想されます。

・農林水産業

<耕作地等>

中山間地域の農地の現状をみると、佐伯地域、吉和地域とも田の割合が高く、特に吉和地域については、農用地の比率が高くなっています。

また、中山間地域等直接支払制度に取り組んでいる集落は、佐伯地域では9集落、吉和地域では13集落となっています。

<農家数等>

農家等の状況をみると、総農家数は佐伯地域が全市の5割以上を占めており、販売農家数では7割弱と多くなっています。

また、水稻受託経営体数は7割以上、認定農業者は6割以上が佐伯地域となっており、認定新規就農者数も全員が佐伯地域となっています。

<森林面積>

中山間地域の森林面積の約5割が人工林となっており、自伐型林業や再造林施業に取り組んでいますが、多くの森林所有者が森林整備をできていない状況があります。

また、森林経営管理制度を活用し、手入れの行き届いてない森林の整備に向けて取組を進めています。

<内水面漁業>

カワウや河川環境の影響により放流したアユの種苗などの定着性が課題となっており、カワウ飛来調査や残留塩素対策など河川環境の調査・改善に向けた取組を進めています。

また、佐伯地域の養鯉生産については、市場の開催を通じて錦鯉のPRに取り組んでいます。

・観光業

本市の中山間地域の観光客数をみると、総観光客数は約60万人となっています。

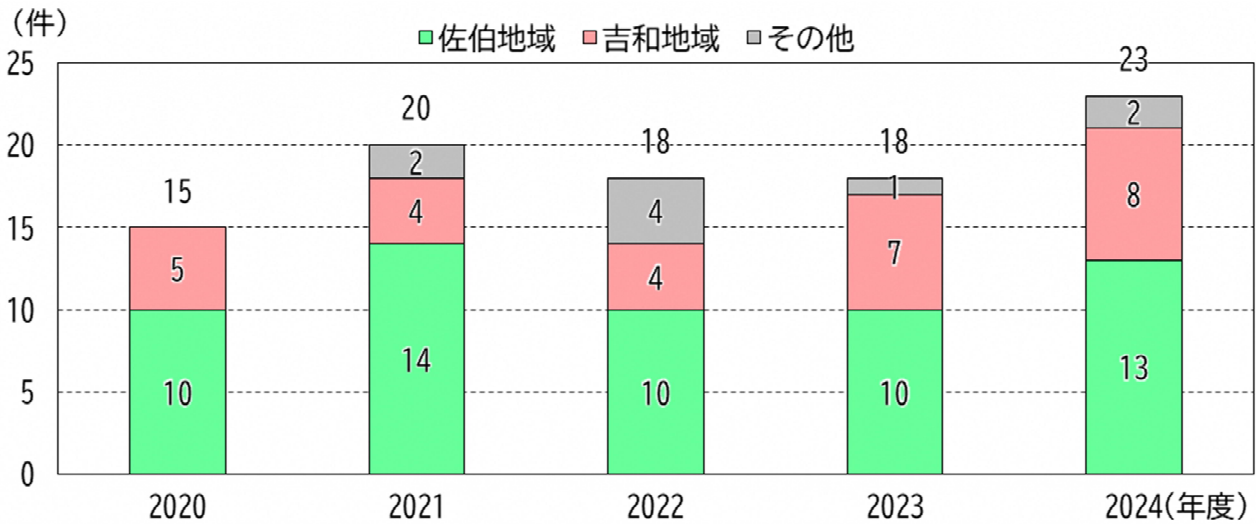
地域別にみると、佐伯・吉和地域ともに広島県内の本市外からの観光客数（市外観光客数）が5割以上を占めています。なお、佐伯地域では市内観光客数が4割弱、吉和地域は市内観光客数が約2割弱を占めています。

(12) 移住・定住の状況

<空き家バンクの成約状況>

空き家バンクの成約件数を見ると、佐伯地域では毎年度 10 件以上の成約があり、吉和地域では、近年増加傾向にあり、2024（令和 6）年度は 8 件となっています。

図 空き家バンクの成約数の推移



資料：廿日市市住宅政策課調べ

<移住定住補助金交付実績>

年 度	移住世帯数 (世帯)	移住者数 (人)	
		移住者総数	うち こども
2020 年度 (令和 2 年度)	4	14	6
2021 年度 (令和 3 年度)	1	3	1
2022 年度 (令和 4 年度)	3	14	8
2023 年度 (令和 5 年度)	6	15	5
2024 年度 (令和 6 年度)	6	20	9
合 計	20	66	29
佐伯地域	19	63	28
吉和地域	1	3	1

資料：廿日市市住宅政策課調べ

4. 中山間地域集落实態調査の結果

廿日市市では、ビジョンの策定にあたり、佐伯・吉和地域の町内会や集落を単位とした組織に、暮らしの現状や課題のほか、これからの取組、目指す姿や長期的な展望など、より厳しさが増している中山間地域の持続可能性が高まるよう、今後の施策の方向性を検討する上での基礎資料とするため、集落实態調査を実施しました。

<集落活動>

集落の活動については、とんどや寄り合いなど従来の活動の縮小・中止が重なることで、近所同士の繋がりが希薄化し、地域力が衰退傾向にある。

<交通>

運転可能な年齢層では困り事はないものの、将来的に運転ができなくなることへの危機感や不安を持つ人が多い。

運転免許がない人の交通手段は、親族などの送迎が中心となっており、公共交通機関の利用は一部となっている。

<買物・ガソリンスタンド>

地域外店舗の利用が多い傾向であるが、地域内店舗の利用を心がけている人も見られる。

<医療>

地域内の病院・診療所の利用が多く、専門的分野については沿岸部の病院・診療所を利用している。

<見守り>

集落内で高齢独居世帯や高齢夫婦世帯を気に掛けながら見守る関係性が維持されている。

<農林業>

畦畔の草刈りや水路掃除などについて農業者が中心になって対応しているが、集落人口が減っていく中で、いつまで活動を維持できるか不安の声がある。

山林に関しては、手入れがされている所が少なく、災害発生の可能性を不安視する意見がある。

<移住・定住>

各地域・地区で移住者はみられ、空き家バンクに物件が登録されると問い合わせは多くある状況である。

多くの住民は、生活サービスが不便であっても、今の場所に住み続けたいと考えている。

5. アンケート調査から見えてくること

(1) まちづくり市民アンケート（中山間地域部分を抜粋）

<お住まいの地域の住みやすさ>

全地域に比べ住みやすいという回答が少なく、その理由として、「公共交通機関が不便」、「買い物の場所がなく日常生活が不便」や「自然災害への不安」などがあげられている。

一方で、住みやすいと回答した理由としては、「静か、閑静、のどか、穏やか」や「自然が豊か、海・山がある」などがあげられている。

<廿日市市への愛着>

愛着を持っている人の割合は全地域に比べて、佐伯地域では78.3%とやや高く、吉和地域では72.0%とやや低いという結果であるが、どちらも7割を超え、多くの方が廿日市市に愛着を持って暮らしている。

<地域行事への参加>

地域行事は縮小・中止されているものの、参加は全地域に比べ、佐伯・吉和地域とも高くなっている。特に吉和地域では、7割近くとなっている。

<地域の支え手としての活動>

高齢者サロン、こどもや高齢者の見守り、地域・PTA・子ども会の役員など地域の支え手としての活動割合は、全地域とほぼ変わらず3割に満たない状況である。

<地域課題への認識と解決に向けての取組>

多くの人と思う地域課題は、「地域活動の担い手不足」、「買い物が不便」、「空き家空き地が多い」や「公共交通機関」となっており、解決に向けて取り組んでいるという意見では、佐伯地域より吉和地域が高い状況である。

<地域課題解決等の取組への参加意向>

自分の住む地域の将来を考えたり、地域の課題を解決したりするための取組への参加については、参加したいが佐伯地域では7.1%、吉和地域では12%、参加したいがどうすればいいのかかわからないが、佐伯地域で11.3%、吉和地域では24%となっているが、両方ともに半数以上が参加は難しいが協力したいという気持ちはあると回答している状況である。

<普段の生活での地域の助け合い>

全地域と同様、ほぼ半数の方が助け合いができていると考えており、その理由として近所づきあいや地域活動や行事によって活発なことを理由に挙げている。

<施策のニーズ度>（各施策の重要度から満足度を差し引いた数値）

施策のニーズ度を見ると、佐伯地域では、幹線道路の整備、路線バスやコミュニティバスの利便性、歩道の整備に続き、医療機関や救急医療体制の整備が高く、吉和地域では、働く場所の状況、耐震化の促進や空き家の解消など住宅の安全対策、自然環境の保護に続き、企業誘致の取組が高くなっており、中山間地域の中でもニーズが異なっている。

(2) 20代～50代、高齢者、移住者アンケート（総合計画から中山間地域分を抜粋）

<暮らすうえで現在感じている課題>

20代から50代では、公共交通、働く場所、買い物、医療や福祉を課題として感じているが、高齢者は加えて、産業（商工業、観光、農業、漁業など）に活気がないことについて課題として感じている。

若者移住者についても、公共交通、働く場所や買い物について課題を感じている。

<暮らすうえで10年後に想定される課題>

20代から50代では、現在感じている課題と大きく変わっていないが、高齢者世帯では、医療・福祉について課題と感じている人の割合が増えている。

若者移住者については、働く場所について課題ととらえる人の割合が増えている。

(3) 小中学生へのアンケート（総合計画から中山間地域分を抜粋）

<まちづくり活動や地域活動への参加>

小学生、中学生ともに、全地域と同じように中山間地域のこどもは、まつり、発表会、運動会、スポーツなどイベントへの参加が多くなっている。

<今の暮らしへの満足>

小学生、中学生ともに、全地域と同じように中山間地域の多くのこどもは満足していますが、小学生に比べて中学生の満足度が高くなっている。

(4) 高校生へのアンケート（総合計画から中山間地域分を抜粋）

<住みやすさ>

沿岸部に比べ、住みやすいという回答が少なく、どちらとも言えないという回答が一番多くなっている。

<住み続けたい>

全地域では、「できれば住み続けたい」が最も多く、次に「高校卒業後は市外に行きたいが、将来は戻ってきたい」となっているが、中山間地域では「甘日市市以外に住みたい」という意見が一番多く、次に「できれば甘日市市以外に住みたい」となっており、「高校卒業後は市外に行きたいが、将来は戻ってきたい」、「住み続けたい」という意見は少ない。

<満足度>

全地域では、10段階評価において、10の選択が最も多く、満足度は高いが、中山間地域では、中程度の満足度が多くなっている。

(5) 中山間地域に関する意識アンケート調査（若者対象）

<現在の居住地の課題>

現在の居住地の課題では、半数以上が公共交通が不便と回答しており、続いて、買い物が不便、地域活動などの担い手不足、働く場が少ないこと、空き家・空き地・耕作放棄地の多さと回答されている。

<暮らしで大切にしていること>

暮らしで大切にしていることの質問では、半数以上が、自然との調和、家族とのふれあい、と答えている。続いて、心の平穏さ、続いて自分らしい生き方、趣味などの余暇の時間が大切にされていることが分かった。

<中山間地域の魅力や自慢>

中山間地域にどのような魅力や自慢できることがあるかという質問には、7割近くの人が自然環境や景観と答えており、続いて、静かな環境、里山・川など自然の中での遊び場の多さ、敷地の広さ、子育て環境と答えられている。

<地域活動やボランティア活動への興味>

地域や他者のために役立ちたいと思うかという質問に対し、8割以上（思う＋どちらかといえば思う）が役立ちたいと回答しており、回答者はコミュニティや地域行事、子ども会・PTAなど子どもや学校、スポーツ・野外活動に続いて、伝統・文化・芸術に関わることに興味を持っていることが分かった。

<今後10年間で継続的に取り組むべきこと>

25年後の2050年においてもみなさんや次世代の人々が暮らし続けられるために、今後10年間で継続的に取り組むべきこと、または、さらに力を入れていくべきことについては、5割を超える人が、交通・物流を維持改善する、買い物・店舗を維持すると答え、4割を超える人が、自然（山・川・里）を良好に保つ、子育て・教育（保小中高）を確保する、医療・介護機能を維持する、働く場所を確保すると答えられている。

6. 中山間地域まちづくり会議と円卓会議

(1) 中山間地域まちづくり会議

中山間地域まちづくり会議は、本ビジョンの策定にあたり、豊かで持続的な中山間地域の実現を目指すために必要な事項について協議することを目的として、コミュニティ組織、廿日市市社会福祉協議会、産業経済団体、PTA、地域活動団体等、学識経験者、広島県で組織しています。

第1回目の会議では、各団体が考える10年後の中山間地域のめざす姿を中心に意見交換を行い、各委員から地域のめざす姿や理想の姿、地域の資源や特色、地域の課題や状況、必要な取組についての意見が出されました。

第2回目の会議では、中山間地域に関する意識アンケート調査結果の報告の後、(仮称)廿日市市中山間地域振興ビジョン(素案)について協議しました。

第3回目の会議では、(仮称)廿日市市中山間地域振興ビジョン(案)、前期振興計画(素案)及び名称について協議しました。

<開催概要と主な意見>

<第1回> 2025(令和7)年4月

各団体が考える10年後の中山間地域のめざす姿について

地域のめざす姿や理想の姿

- ・ 社会が支え合う地域 ・ 子どもに残ってもらえる地域
- ・ 移住者に選ばれる地域 ・ 絶対にあきらめない地域

地域の課題や状況

- ・ 事業者の高齢化や廃業 ・ 情報発信不足
- ・ 担い手不足 ・ まちの景観の悪化

地域の資源や特色

- ・ 食料が作れる安心感 ・ まちと村の混在
- ・ 子どもがのびのびと遊べる ・ 神楽などの文化
- ・ 市内にも通勤できる距離 ・ 保小中高がある

必要な取組

- ・ 子育て世代の移住促進 ・ 担い手支援
- ・ デマンド交通や巡回バス ・ 人と人をつなぐこと
- ・ 地域の特色を活かした学校運営

<第2回> 2025(令和7)年7月

中山間地域に関する意識アンケート調査結果の報告及び本ビジョン素案について

意識アンケートについて

- ・ 地域活動への参加状況について
- ・ 地域活動の開催状況について
- ・ 地域での連絡手段について

本ビジョン素案について

- ・ 佐伯吉和地域の具体の潜在力を示すべき
- ・ 人口減少は前提として考えるべき
- ・ 地域で話し合っって何とかしようという力はある
- ・ 地域の良いものを残していくこと



<第3回> 2026(令和8)年1月

(仮称) 廿日市市中山間地域振興ビジョン案について

(仮称) 廿日市市中山間地域振興ビジョン前期振興計画素案について

ビジョン案について

- ・目指す指標と維持すべき人口の考え方をわかりやすく記載すること
- ・人口が減少し、いろいろなものがなくなっていく中で、そこをどうにか誇りを持って頑張っていこうと考えることが必要

前期振興計画案について

- ・地域外から、佐伯・吉和地域に来てくださいと言える内容になっていかなければいけない
- ・指標については、全市ではなくできるだけ中山間地域の状況がわかる指標に設定すること
- ・地域で子どもを育てる、子育て世代を支える。子どもたちが地域に愛着を持って育っていくことが重要



(2) 円卓会議 (ワークショップ)

円卓会議 (ワークショップ) は、「はつかいち未来ビジョン2035」の策定に係る市民参画の取組の一つである、若者世代を中心とした地域づくり会議を引き継ぎ、将来像の実現に向け、若者世代が考える意見の把握などを目的として、これまで佐伯・吉和地域でそれぞれ4回実施しており、今後も継続していきます。

この円卓会議の中で、地域や人とのつながりが中山間地域にとっての資源や強みであることや、ずっと住み続けられる地域にしていきたいという思いなどが様々なキーワードから垣間見ることができました。

<開催概要と主な意見>

佐伯地域 2024(令和6)年9月

10年後もみんなが幸せに暮らせるさいきとは

- ・チャレンジを後押しできる地域
- ・大人になった子どもが帰って来なくなるまち
- ・保小中高がある
- ・コミュニケーションできる場所が増えること
- ・田畑に手が入っている



吉和地域 2024(令和6)年8月

吉和地域づくりプランの取組について

空き家・移住定住

- ・散歩が気持ちいい
- ・季節を感じる

福祉・健康・防災

- ・災害に強い
- ・診療所の先生がすばらしい

子育て・学び

- ・みんなに見守られている
- ・他地域との交流を増やす

物販農林観光業

- ・耕作放棄地がない
- ・定期的な会議が必要



佐伯地域 2025(令和7)年2月
2050次世代とともにさいき暮らしを続けるためにチャレンジしたいこと



- ・農業や農業体験
- ・コミュニティづくり
- ・移住者支援
- ・地域で子育て
- ・居場所づくり
- ・魅力発信

吉和地域 2025(令和7)年3月
2050次世代とともによしわ暮らしを続けるためにチャレンジしたいこと



- ・景観を守る
- ・学びの環境づくり
- ・移住、定住の支援
- ・自分が楽しく
- ・あいさつ、見守り
- ・農地の維持管理

佐伯地域 2025(令和7)年6月 ・ 吉和地域 2025(令和7)年7月

みんなのできる具体的なコト

- ・こどもの居場所づくり
- ・移住者へのフォロー
- ・つながりの強化
- ・地域情報の発信
- ・農業体験の提供、支援
- ・仕事の組合せの提案
- ・交流事業の開催
- ・大きなグループづくり

中山間地域の将来像へのキーワード

- ・自然との調和
- ・ずっと住み続けられる
- ・山と水、緑を生かす
- ・戻りたくなる地域づくり
- ・心の豊かさ ・つながり
- ・未来につなぐ ・ちいと山
- ・チャレンジ ・こどもがいる ・みんながつながる

佐伯地域 2025(令和7)年9月
つながりづくりについてできそうなこと

- ・情報発信
- ・町内会のつながり
- ・防災のイベント

子どもの居場所づくりでできそうなこと

- ・お寺の鐘つき
- ・田んぼでの遊び場づくり
- ・世代間交流

農業自然体験でできそうなこと

- ・収穫体験
- ・ホテルまつり
- ・料理教室
- ・川遊び



吉和地域 2026(令和8)年1月
「訪れたい」、「関わりたい」につかえるもの

- ・古民家
- ・冠遺跡
- ・収穫祭
- ・とんど

- ・観光農園
- ・景観維持
- ・体験ツアー
- ・民泊

「住みたい」、「住み続けたい」に必要なこと

- ・仕事
- ・住居
- ・学校
- ・保育園
- ・お店

- ・燃料
- ・診療所
- ・高齢者施設
- ・コインランドリー



7. 中山間地域の課題と潜在力

(1) 中山間地域づくりを進める上での課題

中山間地域においては、人口減少や少子高齢化をはじめ、様々な課題が生じており、それぞれの分野ごとで取り組んでいます。人口減少のスピードが高まると予測される中、厳しさが増す現実を直視し、新たにはじめることや変えること、やめることなど、これまでの延長線上にはない強い地域づくりを行い、持続性を高めることが必要です。

<暮らしの課題>

これまで、地域拠点・地区拠点・生活拠点を整備し、生活の利便性を確保してきましたが、将来的な人口の減少を考慮すると、これらのインフラとともに地域内の店舗や医療機関、金融機関などの維持や、そこに行くための交通手段の確保について、将来を見据えた取組が必要です。

また、現在行われている地縁による集落での見守りが、今後、関係の希薄化が見込まれる中、これまでどおりの機能を果たし、安心して暮らし続けることができるように、地域コミュニティの維持強化を図る必要があります。

さらに、豊かな暮らしを支える中山間地域の多面的機能の持続的発揮には、農地や森林をはじめとした自然環境を保っていくことが重要です。

<仕事の課題>

中山間地域においても、大規模小売店舗、工業団地や観光資源によって雇用が確保され、また、商店街や個人事業主などにより様々な業種が営まれています。中山間地域においては、特に働く場所、業種が少ないとの意見が多く、若者のニーズやライフスタイルに応じた多様な働き方ができることが求められています。

そのほか、農地や森林、これらつながる観光資源など中山間地域の特性を活かした地域産業の収益性を高めるなどの取組も必要です。

また、中山間地域の特性に加えて、DXの活用をはじめとする場所にとらわれない起業など、チャレンジを後押しし、人を呼び込んでいくことも重要です。

<担い手不足の課題>

人口移動のうち社会増減を見てみると、日本人では高校卒業後から20代までの転出が最も多く、その後30代から40代でUターンなどによる転入がみられますが、集落の担い手が充足していない現状があります。

こうしたことから、若い世代の確保はもとより、出身者の参画だけではなく、Iターンや関係人口も含め中山間地域に積極的に関わる人材の創出を行う必要があります。

また、現状ではまちづくり、ひとづくりに携わる人が限られているため、地域のみんなで、こどもから大人までが関わるができる仕組みづくりが重要です。

(2) 中山間地域の持つ潜在力

<自然環境>

中山間地域には、動植物を育む生物多様性、自然の恵みを生かし食糧生産がなされる農地、カーボンニュートラルの実現に向けた二酸化炭素の吸収源や木材の生産基盤である森林、アユやアマゴの遊漁や豊富な水資源を有する河川である太田川、小瀬川、玖島川などから形成される農村の景観、中でも四季の変化に富んだ田園風景などのふるさとの原風景や、安らぎのある居住空間のほか、洪水防止機能、河川から瀬戸内海に至る水循環などが多面的機能として挙げられ、潜在力と考えられます。

<資源の活用>

農のある暮らし、冠山、十方山や大峰山での登山、サイクリングやランニング、ゴルフ、もみの木森林公園や岩倉キャンプ場などでの多様なアウトドア活動、めがひらスキー場でのウィンタースポーツ、佐伯総合スポーツ公園での様々なスポーツ、佐伯国際アーチェリーランドでのフィールドアーチェリー等による心身のリフレッシュ効果、子どもたちの生きる力や情緒を育むこれらの体験を通じた学習機能など、都市部では得ることのできない中山間地域特有の宝であり潜在力と考えられます。

<中山間地域の立地>

佐伯地域は都市沿岸部との近接性を持ち、農産物や加工品の出荷などの経済活動に際して優位性を保ちながら、通学や通勤についても国道2号西広島バイパスには30分圏内で、JR宮内串戸駅まで路線バスで接続されているなど、一定の利便性が確保されています。

吉和地域は、中国自動車道吉和I.C.と国道186号の連結による広島市や九州圏からの良好なアクセス環境を持つことから、観光交流施設等に大きな優位性を与えています。

このような立地状況は、潜在力と考えられます。

<歴史文化>

歴史民俗資料館、ウッドワン美術館などの文化施設、冠遺跡などの埋蔵文化財、安井家母屋などの有形文化財、石見津和野路石だたみ道（津和野街道）などの史跡に加えて先人から継承されてきた祭りや神楽などの無形文化財、伝統文化や慣習、地域の歴史などはそこに暮らす人々の誇りや糧になるとともに中山間地域の大きな潜在力と考えられます。

<暮らす人々>

ヒアリングやアンケートからは、中山間地域に住む人々が、地域や集落に愛着や誇りを持ちながら暮らしており、中でも、自然との調和や家族とのふれあい、そして、心の平穏さ、自分らしい生き方を大切に、社会や地域、他者のために役立つようなことをしたいと思う気持ちがあり、潜在力と捉えることができます。

これら中山間地域自体が持つ潜在力と中山間地域に住む人々が持つ思いを潜在力として両輪に据え、はじめて課題に向かっていくことができます。

こうした中山間地域の潜在力は、都市・沿岸部の住民なども引きつけていき、いわゆる関係人口の創出に向けて大きな推進力になると考えられます。

第Ⅱ部 基本構想

1. 2050年を見据えた10年後の将来像

2035年に目指すまちの姿である将来像を次のように定めます。

つながる × ひろがる × はじまる

～ "訪れたい" "関わりたい" "住みたい" "住み続けたい" ふるさとに ～

<つながる>

まちづくり会議や地域づくり円卓会議（ワークショップ）、アンケートの中では、地域や人がつながる、集まる、交流などのキーワードが目立ち、人とのつながりや関わりが中山間地域にとっての資源であり強みであると考えていることがわかりました。

さらに、今後予想される人口減少を見据え、2050年に向けて中山間地域を維持していくために、定住人口だけではなく、交流人口、出身者や関係人口など、これらのすべての人がつながり、さらに活用しきれていない中山間地域が持つ様々な地域資源も「つながる」ことを目指します。

<ひろがる>

中山間地域で暮らしていく中で、これまでになかった「つながる」が生まれていくにつれて、連携・協働が進み、こどもたちや若者だけでなく、みんなの夢や未来、チャンスなど様々な可能性・選択肢が大きく「ひろがる」ことをイメージしています。

<はじまる>

「つながる」×「ひろがる」が増えていくと、中山間地域に関わる人が夢や未来に向けて動き出し、ドキドキやワクワク、新たなチャレンジなどが「はじまる」ことをイメージしています。

この3つを掛け合わせて、人それぞれの〇〇がつながる、〇〇がひろがる、〇〇がはじまる姿を、「**つながる × ひろがる × はじまる**」と表現し、にぎやかで活気あふれる中山間地域の将来像として定めました。

～ "訪れたい" "関わりたい" "住みたい" "住み続けたい" ふるさとに ～

この将来像の実現に向けてみんなで取り組んでいくことで、中山間地域である佐伯・吉和地域に「訪れたい」、「関わりたい」、「住みたい」、「住み続けたい」という思いがそれぞれの心に芽生え、みんなの理想のふるさとに近づいていくことを表しています。

そして、この将来像の実現は、はつかいち未来ビジョン2035の基本理念「市民一人ひとりがともに幸せに暮らせるまちづくり」につながっていきます。

2035年に目指すまちの姿である将来像の実現に向けての指標

2050年の中山間地域の人口5,000人以上を維持するため

2035年の**人口7,300人以上**を目標とします

中山間地域づくりを進めるうえで、暮らし、仕事、担い手不足の3つの課題の多くが、人口減少に関連していると考え、本ビジョンでは中山間地域の人口を指標とします。

指標の設定にあたっては、国において、地域の仕事でありつつ暮らしを支える生活サービス等の立地条件に基づき、各種施設立地と人口規模などについて、国土交通省が「市町村人口規模別の施設の立地確率」を示しています。

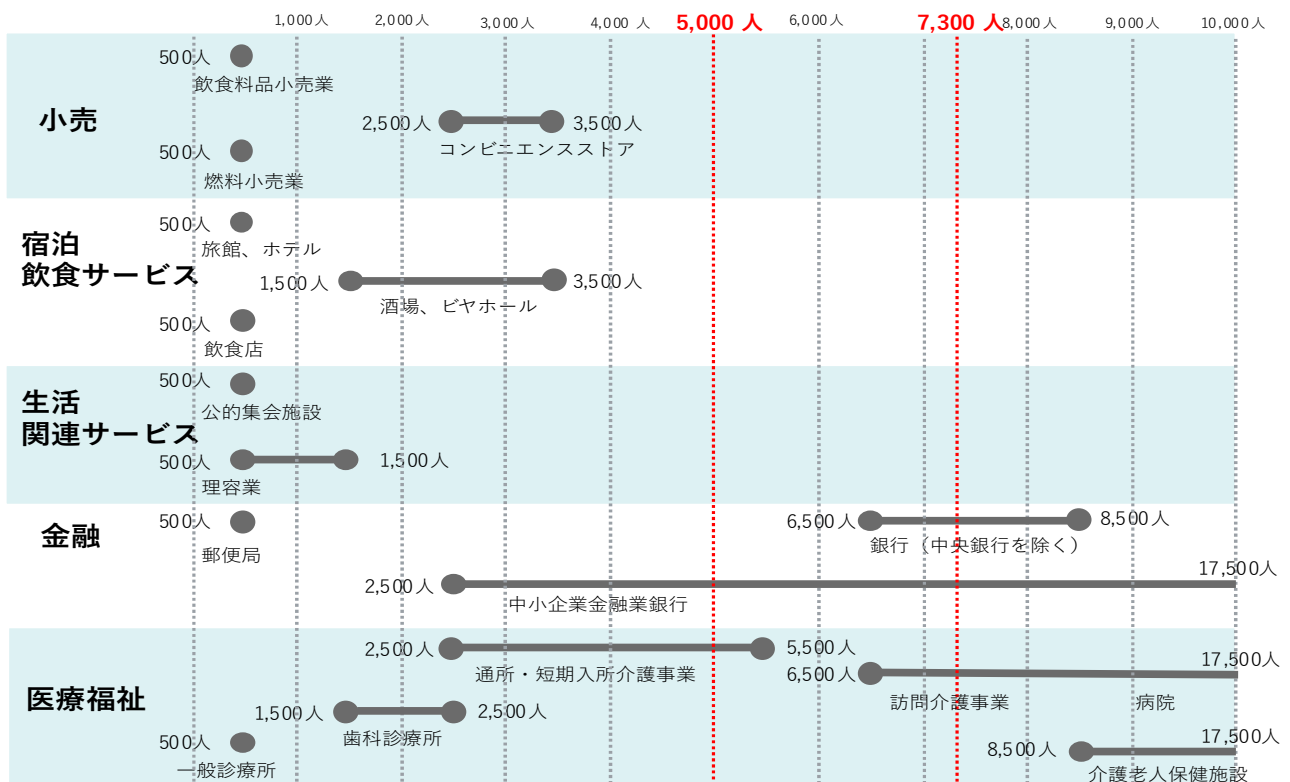
この中で、飲食料品小売業、燃料小売業、飲食店、郵便局、理容業及び一般診療所は500人、歯科診療所は1,500人、コンビニエンスストア及び通所・短期入所介護事業所は2,500人、病院は6,500人で50%の立地確率とされています。

住民基本台帳による人口推計では、2050年には中山間地域の人口は4,400人程度になることが見込まれ、病院、通所・短期入所介護事業所、コンビニエンスストアなどの撤退可能性が高まり、地域の自立性や持続性が低下することが懸念されます。

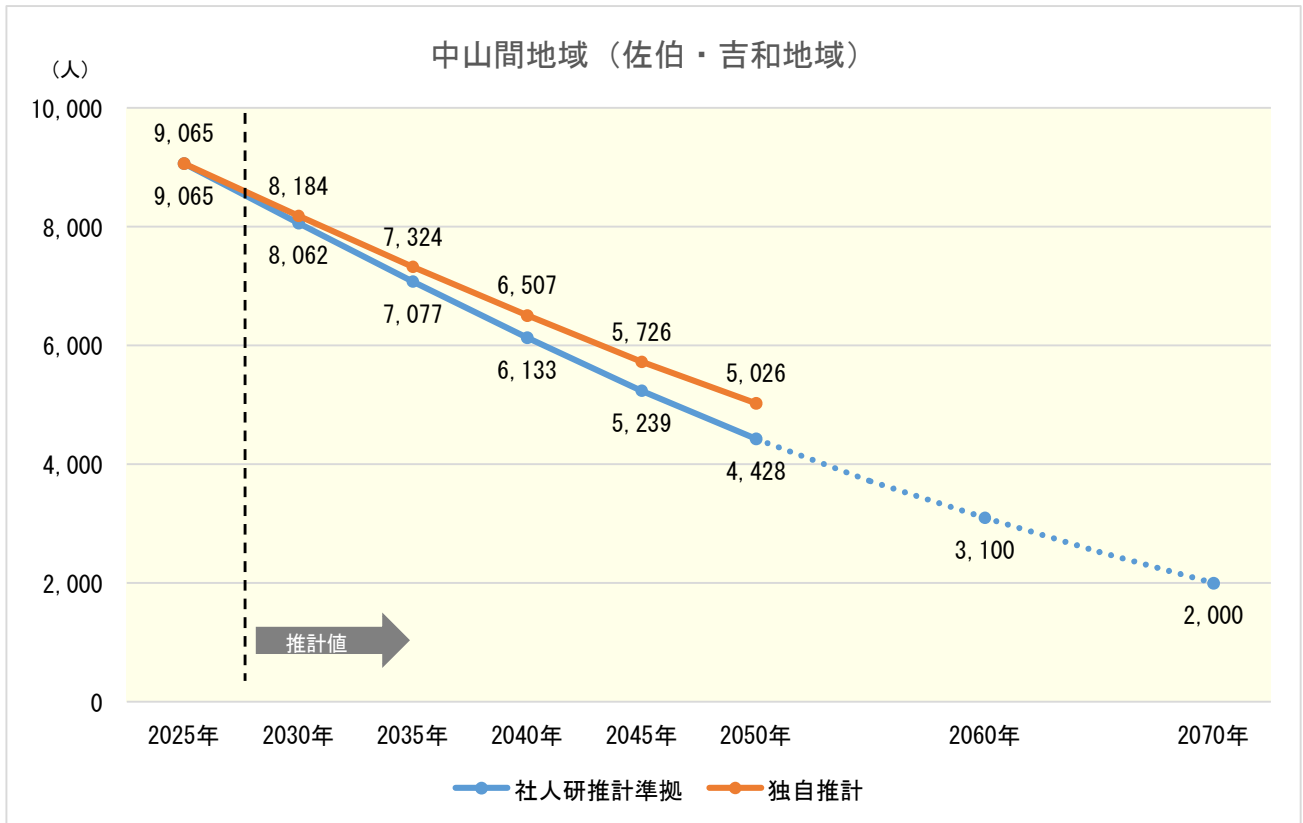
そうした中、中山間地域に「住み続けたい」という市民の思いを受け止め、様々な地域力や生活サービス等を確保するため、効果的かつ持続的に中山間地域のまちづくりを進めることにより、中山間地域への転入を毎年10世帯以上を確保することで、2050年の中山間地域の人口減少のスピードを緩め、2035年の人口7,300人以上、2050年の人口5,000人以上を維持することをビジョンの指標とします。

対個人サービス施設の立地と人口規模（人口1万人以下）

（立地確率50%→80%に達する人口規模）



出典：国土交通省 国土審議会 地域生活圏専門委員会「とりまとめ報告書（参考資料）」
p24（2020年 経済センサス等より算出、三大都市圏除く）



推計	基準人口	出生率	移動率
国立社会保障・人口問題研究所推計準拠	2025（令和7）年10月1日現在の住民基本台帳人口 9,065人	実績値の動向を元に 仮定 （社人研公表値）	2005（平成17）年～2020（令和2）年の間に観察された地域別の平均的な人口移動が2070（令和52）年までに継続すると仮定
はつかいち未来ビジョン2035（総合計画）	2025（令和7）年1月1日現在の住民基本台帳人口 115,423人	2050（令和32）年に市民の希望出生率1.91に上昇	2005（平成17）年～2020（令和2）年の間に観察された地域別の平均的な人口移動が2050（令和32）年までに継続すると仮定
本ビジョンにおける推計（独自推計）	2025（令和7）年10月1日現在の住民基本台帳人口 9,065人	同上	上記を佐伯地域・吉和地域別に算出に加え、2050年の人口5,000人以上を見据え毎年子育て世代約10世帯を転入人口として加算

2. 中山間地域のまちづくり施策の3つの柱

3つの柱についての考え方

2035年に目指すまちの姿である将来像の実現に向け、「**こどもから大人まで、地域の未来を担う人材**」を増やすこと、地域やそこに関わる人に活力が生まれるように「**地域資源**」を活かすこと、そして、「**安心した日々の生活**」を支える、この3つを重要な施策の柱として、中山間地域のまちづくりを考えることとしました。

柱1 「人材をふやす」

みんなあつまれ！

～人が「つながる」、夢が「ひろがる」、未来が「はじまる」～

急激な人口減少が見込まれる中山間地域においては、こどもから大人まで世代を超え、また、地域内外にかかわらず、すべての関わる人とつながっていき、若者を中心に人の流れをつくることで、地域の中で活躍できる人材を増やしていくことが必要です。

柱2 「地域資源をいかす」

地域資源を活力に！

～資源が「つながる」、チャンスが「ひろがる」、創造が「はじまる」～

中山間地域の持つ様々な資源を活かすことで、地域やそこに関わる人に活力が生まれることや、人が地域に根付き暮らし続けていくための産業の活性化や多様な働き方の実現につながる必要があります。

柱3 「生活をささえる」

笑顔と安心をつくりだす！

～ところが「つながる」、笑顔が「ひろがる」、やさしさが「はじまる」～

中山間地域の中で医療・交通・買物など基本的な生活サービスを受けることができ、安心した日々の生活を送るためには、これらの環境を支えていくことが必要です。

3. 中山間地域のまちづくり施策の3つの視点

3つの視点についての考え方

中山間地域のまちづくり施策に3つの柱をもとに取り組みにあたって、施策の効果を高めるために必要な共通の視点を定めます。

まずは、みんなが地域に関わることで、地域の多様性と持続性を高める「みんなでまちづくり」の視点、次に、波及性と持続性を考慮した「循環を意識したまちづくり」の視点、最後に、変化に適応し効率的な施策を講じる上で必要な「時代の流れに応じたまちづくり」の視点、これらの3つの視点を定め施策の実施に取り組みます。

視点1 「みんなでまちづくり」

地域・地区・集落で生活を営むすべての人とともに関係人口を加え、様々な課題を他人事ではなく自分事にとらえ、協働のまちづくりを進めます。

視点2 「循環を意識したまちづくり」

ヒト・モノ・コト・カネ・環境などの様々な切り口においても循環を意識して施策に取り組むことでまちづくりを進め、施策の波及性と持続性を高めます。

視点3 「時代の流れに応じたまちづくり」

コロナ禍を契機とした価値観や行動様式の変容、DXをはじめとした技術の進歩や普及など、刻々と変わりゆく時代から生じる課題を的確に捉え、変化に適応したまちづくりを進めていきます。

4. 中山間地域のまちづくり施策の取組方針

柱1 「人材をふやす」

(1) 人の流れをつくる

地方創生 2.0 では関係人口創出の重要性に言及されていますが、地域や集落の力が失われつつある中山間地域においては、この取組は重要であると考えています。

こうしたことから、移住・定住の推進や交流人口の拡大、関係人口の創出を目指し、出身者や縁のある人をはじめ、大学など産学官との連携や、イベントへの参加者や中山間地域に興味を持つ人との関わりを増やすことで地域の担い手を確保するとともに、U・I・J ターンにもつなげる活動を進めます。

(2) 若者を増やす

全国的に中山間地域をはじめとした地方の人口移動では、およそ高校卒業後から30代前半にかけての進学・就職・婚姻などによる転出に比べ、子育て世代の転入が少ないという状況が見られますが、本市中山間地域でも同様の動きがみられます。

こうしたことから、転入・転出の循環のバランスを取ることが、地域の持続性を高める上で重要です。

このためには、転入の増加や転出の抑制により若者などを増やす必要があり、若者や子育て世帯が地域に根付くために必要なライフステージやライフスタイルに応じた環境構築が必要です。

(3) 世代を越えた多様な人づくり

こどもから大人まで、それぞれの仕事や特技、これまでの経験や思いをまちづくりや教育、経済活動などにつなげていくことが求められています。

2024（令和6）年度に行った集落实態調査では、集落やコミュニティの担い手不足がいつそう明らかになるとともに、現在の活動は過去から蓄積された集落の力の発揮に他ならず、見守りなどが続けられ将来にわたって安心して暮らしていくためには、新たな担い手の確保を意識したコミュニティ活動の推進が必要なことがわかりました。

そのためには、行政と地域が連携して、これまでコミュニティ活動にあまり関わりがなかった世代や多様な主体を巻き込んでいくように取り組むことが大事です。

柱2 「地域資源をいかす」

(1) 多様な働き方の実現

都市・沿岸部に比べて事業所数の少ない中山間地域では業種などが限られる一方で、ここでの暮らしには、様々なライフスタイル・ライフステージがあり、これらに応じた多様な働き方を実現していくこと、また、地域資源を活かした起業など積極的にチャレンジしていく市民を後押ししていくことが、地域に根付き暮らし続けていくために必要です。

(2) 地域産業の活性化

中山間地域は、農地や森林などその特性を活用した農林水産業をはじめとし、観光事業者のほか、飲食、小売店、自動車関連、流通や製造業など人々の暮らしに密接に関わる様々な事業者があります。

これらの地域産業の事業活動自体が中山間地域の活力そのものを表しており、地域産業の活性化に向けて取り組むことが必要です。

(3) 地域資源の保全と継承

高齢化・人口減少による地域の共同活動が失われることによって、人々の暮らしの中で育まれた農山村の文化や知恵のほか、農地や森林の持っている洪水防止、水源涵養、大気調節機能、生物多様性の保全、癒やしや安らぎをもたらす機能が損なわれつつありますが、継続的に地域資源を活かしていくためには、中山間地域の持つ多面的機能などの理解の上でこれらを保全しつつ、次世代に継承していくことが必要となります。

柱3 「生活をささえる」

(1) 地域医療の確保や保健・福祉の充実

市民が心と体の健康を保ち幸せを感じながら過ごしていくためには、地域医療や保健・福祉の確保が重要です。

また、高齢に伴い自動車の運転ができなくなることから、医療機関等へのアクセスの確保についても重要性が高まっています。

そのほか、健康寿命を維持するための、スポーツなどを実践・継続できる環境づくりも大切です。

(2) 拠点づくりと生活基盤の維持

これまで、地域住民の利用を対象とした地域拠点（各支所）、それを補う地区拠点（津田・友和・吉和）、さらに、集落住民の生活利便性を維持するための小さな拠点（玖島・浅原・吉和）として位置づけ、各拠点間を公共交通で結んでいるが、今後ともこれらを結節する公共交通が運行され、店舗などが維持されることで生活サービスが行き届き、市民の生活基盤が確保されていることが重要です。

(3) 安全・安心の確保

中山間地域の一部の集落は、山や谷などの傾斜の中に位置することが多く、風水害の影響を受けやすい集落があり、高齢化率も高く、緊急避難所等への距離も遠い傾向にあり、共助など地域主体の防災・減災を進めることが必要です。

また、人口減少や人間関係の希薄化などによる集落の力の低下も見受けられ、防犯対策の取組の重要性が高まっています。

5. ビジョンの施策体系

将来像

つながる × ひろがる × はじまる

～ “訪れたい” “関わりたい” “住みたい” “住み続けたい” ふるさとに ～

3つの柱

3つの視点

柱1

「人材をふやす」

みんなあつまれ！

～人が「つながる」、夢が「ひろがる」、未来が「はじまる」～

急激な人口減少が見込まれる中山間地域においては、こどもから大人まで世代を超え、また、地域内外にかかわらず、すべての関わる人とつながっていき、若者を中心に人の流れをつくることで、地域の中で活躍できる人材を増やしていく必要があります。

柱2

「地域資源をいかす」

地域資源を活力に！

～資源が「つながる」、チャンスが「ひろがる」、
創造が「はじまる」～

中山間地域の持つ様々な資源を活かすことで、地域やそこに
関わる人に活力が生まれることや、人が地域に根付き暮らし続けて
いくための産業の活性化や働き方の実現につなげる必要があります。

柱3

「生活をささえる」

笑顔と安心をつくりだす！

～ところが「つながる」、笑顔が「ひろがる」、
やさしさが「はじまる」～

中山間地域の中で医療・交通・買物など基本的な生活サービス
を受けることができ、安心した日々の生活を送るためには、これ
らの環境を支えていく必要があります。

視点1
視点2
視点3

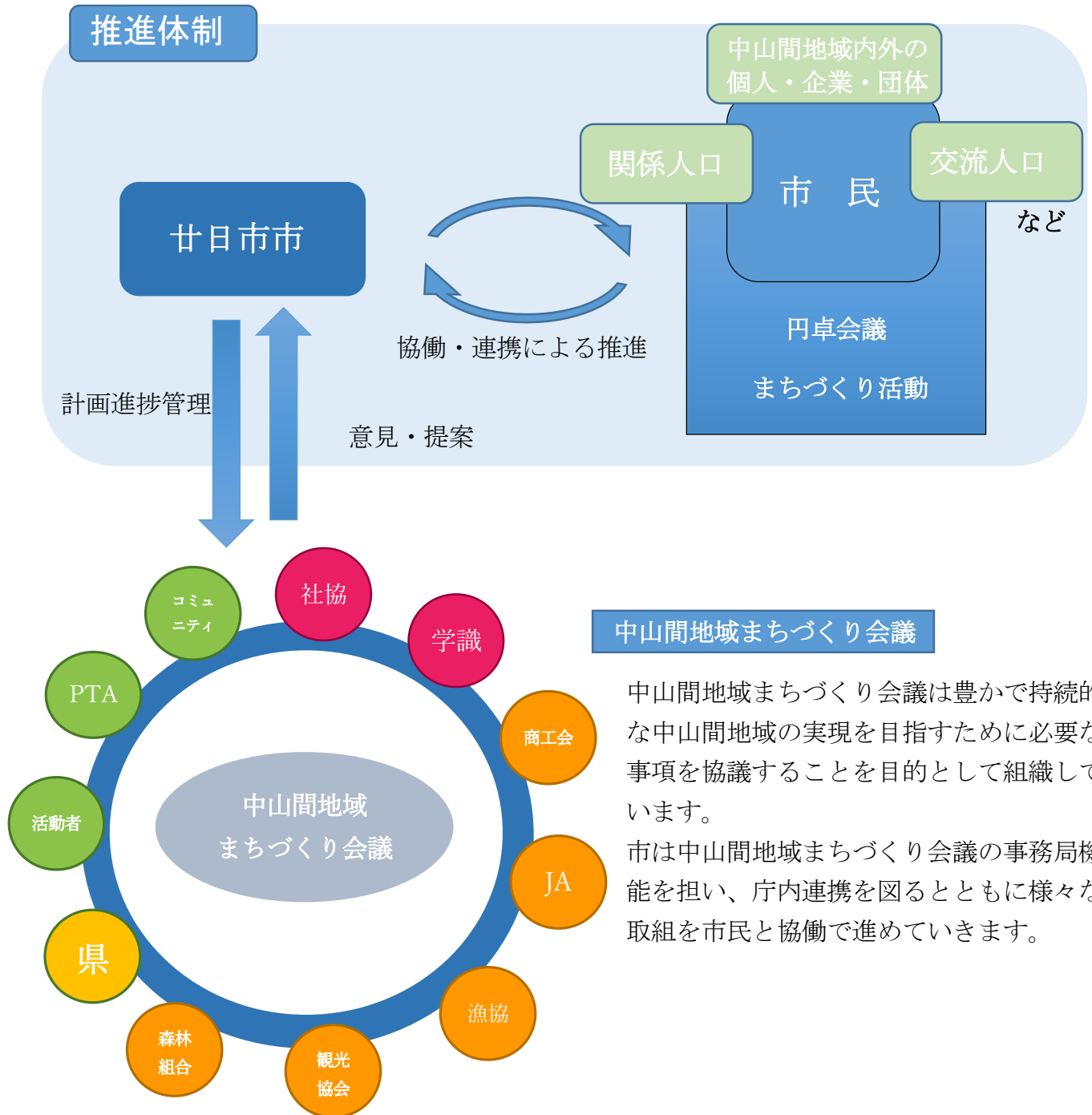
時代の流れに応じたまちづくり
循環を意識したまちづくり
みんなでまちづくり

取組方針	目指す姿
(1) 人の流れをつくる	多くの人が様々な目的で訪れる、移住・定住も進んだ魅力ある地域になっている
(2) 若者を増やす	若者や子育て世代が地域に根付いてイキイキと暮らし続けている
(3) 世代を超えた多様な人づくり	コミュニティ活動に多様な人材が参画し、人づくりが進んでいる
(1) 多様な働き方の実現	ライフスタイル・ライフステージに応じた多様な働き方ができる地域になっている
(2) 地域産業の活性化	地域産業が活性化し、各産業の起業とともに人と事業者と地域のつながりが増えている
(3) 地域資源の保全と継承	暮らしの中で地域資源が次世代に継承され、地域に活力が生まれている
(1) 地域医療の確保や保健・福祉の充実	地域に暮らす人が、健やかに過ごしている
(2) 拠点づくりと生活基盤の維持	地域の拠点にみんなが集まり、にぎわいが生まれている
(3) 安全・安心の確保	地域での見守り・支え合いの中で、安全・安心な暮らしを続けている

6. ビジョンの推進体制

ビジョンの将来像の実現のため、市民や中山間地域まちづくり会議を中心とした多様な主体が連携・協力し、みんなで中山間地域のまちづくりを進めていく必要があります。

こうしたことから、ビジョン及び基本計画の進捗管理や意見・提案、円卓会議の開催など様々な取組を進めていきます。



資料編

1 公立学校及び保育園等の生徒・児童数の推移

<佐伯高等学校>

	2021年 (R 3)	2022年 (R 4)	2023年 (R 5)	2024年 (R 6)	2025年 (R 7)
3学年	23	30	19	39	24
2学年	30	21	39	24	38
1学年	23	40	27	40	32
計	76	91	85	103	94

資料：廿日市市中山間地域振興室調べ

<中学校>

		2021年 (R 3)	2022年 (R 4)	2023年 (R 5)	2024年 (R 6)	2025年 (R 7)
佐伯 中学校	3学年	52	58	63	55	53
	2学年	62	63	54	53	47
	1学年	64	55	54	47	34
	計	178	176	171	155	134
吉和 中学校	3学年	2	8	6	7	3
	2学年	7	6	6	3	4
	1学年	6	6	4	4	5
	計	15	20	16	14	12

資料：学校基本調査

<小学校>

		2021年 (R 3)	2022年 (R 4)	2023年 (R 5)	2024年 (R 6)	2025年 (R 7)
友和小学校	6学年	27	36	40	32	27
	5学年	35	41	32	28	29
	4学年	42	32	28	29	29
	3学年	31	27	29	32	31
	2学年	27	29	33	29	29
	1学年	28	33	28	30	21
	計	190	198	190	180	166
津田小学校	6学年	29	19	13	11	12
	5学年	19	12	11	12	13
	4学年	13	11	11	14	9
	3学年	11	12	14	9	11
	2学年	12	14	8	11	9
	1学年	13	9	11	10	8
	計	97	77	68	67	62
吉和小学校	6学年	5	5	4	5	6
	5学年	5	5	4	6	4
	4学年	6	5	6	4	6
	3学年	5	7	4	6	4
	2学年	7	5	6	4	1
	1学年	6	6	4	1	3
	計	34	33	28	26	24

資料：学校基本調査

<保育園等>

		2021年 (R 3)	2022年 (R 4)	2023年 (R 5)	2024年 (R 6)	2025年 (R 7)
友和保育園	5歳児	18	14	18	11	16
	4歳児	16	17	11	13	12
	3歳児	11	7	10	3	7
	2歳児	10	12	10	11	11
	1歳児	12	9	9	8	9
	0歳児	6	5	2	5	4
	計	77	69	61	60	67
津田保育園	5歳児	10	11	10	8	7
	4歳児	12	10	9	9	3
	3歳児	11	7	10	3	7
	2歳児	4	7	1	7	4
	1歳児	5	1	6	5	8
	0歳児	1	2	1	3	0
	計	43	38	37	35	29
吉和保育園	5歳児	6	3	0	3	2
	4歳児	3	0	3	2	3
	3歳児	2	3	2	3	0
	2歳児	2	1	2	0	3
	1歳児	1	2	0	2	2
	0歳児	0	0	1	0	0
	計	14	9	8	10	10
友和こども園	5歳児	16	18	13	14	9
	4歳児	18	13	14	10	11
	3歳児	13	13	11	11	9
	2歳児	3	3	3	4	2
	1歳児	3	2	3	2	2
	計	53	49	44	41	33

資料：廿日市市こども課調べ

2 産業活動の状況

<事業所数・従業者数の推移等>

	年次	事業所数（事業所）				従業者数（人）			
		全産業	第1次産業	第2次産業	第3次産業	全産業	第1次産業	第2次産業	第3次産業
廿日市市	2012	4,225	42	779	3,404	39,944	425	10,017	29,502
	2016	4,445	40	748	3,657	43,360	383	10,371	32,606
	2021	4,334	43	709	3,582	45,584	412	10,820	35,875
うち 中山間地域	2012	526	13	205	308	4,421	137	2,171	2,113
	2016	498	15	187	296	5,157	151	2,396	2,610
	2021	493	16	164	313	5,062	156	2,470	2,550
佐伯地域	2012	462	8	198	256	4,064	97	2,113	1,854
	2016	448	9	182	257	4,809	108	2,326	2,375
	2021	435	10	157	268	4,675	104	2,377	2,290
吉和地域	2012	64	5	7	52	357	40	58	259
	2016	50	6	5	39	348	43	70	235
	2021	58	6	7	45	387	52	93	260

資料：総務省・経済産業省「経済センサス-活動調査」

単位：ha

<耕作地等>

	田	畑	田+畑 (農用地)	中山間 協定面積	多面的 実施面積	水稲 作付面積	生産数 量
廿日市市	818.7	228.6	1,047.4 (291.6)	180(22)	90.32(10)	308.92	1,547t
佐伯地域	576.8	121.2	698.0 (190.8)			197.66	988t
吉和地域	133.4	38.1	171.5 (100.8)			69.25	346t

資料：廿日市市農林水産課調べ 2024（令和6）年度末

中山間協定面積とは、中山間地域等直接支払交付金の協定面積（）内は協定数

多面的実施面積とは、多面的機能支払交付金の実施面積（）内は実施組織数

<農家数等>

	総農家数 (戸)	販売農家 (戸)	自給的 農家 (戸)	水稲受託 経営体数 戸/ (ha)	認定農 業者数	認定新規 就農者数
廿日市市	1,242	413	829	31 (276)	28	6
佐伯地域	667	285	382	23 (12)	18	6
吉和地域	33	11	22	3 (14)	6	0

資料：2020 農林業センサス 廿日市市農林水産課調べ

(2024（令和6）年度末認定農業者数・2024（令和6）年度末認定新規就農者数)

<森林面積>

単位：ha

	国有林	民有林(市有林・県有林等を含む)			
		総数	人工林	天然林	その他
廿日市市	7,258.81	34,921.51	15,932.90	18,586.47	160.11
佐伯地域		16,071.88	8,740.56	7,171.21	84.50
吉和地域		10,236.98	4,438.17	5,714.31	400.77

資料：広島県林務関係行政資料 2024（令和6）年10月

<内水面漁業>

	遊漁者数		放流事業		
	アユ	アマゴ	アユ	アマゴ	ウナギ
廿日市市	356人	473人	998.9kg	803.5kg	20kg

資料：廿日市市農林水

産課調べ 2024（令和6）年

<観光客数と観光消費額・うち地域別>

	市内 観光客数	市外 観光客数	県外 観光客数	総観光客数
廿日市市	701,122人 (8.4%)	1,791,192人 (21.6%)	5,815,531人 (70.0%)	8,307,845人
佐伯地域	132,128人 (35.7%)	209,108人 (56.5%)	28,716人 (7.8%)	369,952人
吉和地域	41,159人 (18.0%)	133,107人 (58.1%)	55,020人 (24.0%)	229,286人

資料：広島県観

光客数の動向 資料：廿日市市観光課調べ 2024（令和6年）

<観光客数・うち主な地域別観光客数>

	もみのき 森林公園	クヴェーレ 吉和	スパ羅漢	佐伯総合 スポーツ公園 (大型遊具)	岩倉キャン プ場
観光客数	111,200人	74,832人	77,411人	32,238人	23,533人

資料：広島県観光客数の動向 資料：観光課調べ 2024（令和6年）

3 基盤施設等の状況

<道路状況（市道・実延長）>

	実延長
廿日市市	647,403m(95.1%)
佐伯地域	108,791m(90.7%)
吉和地域	34,160m(76.8%)

資料：廿日市市維持管理課調べ 2024（令和6）年度末 ※()

内は舗装率

<水道普及率等>

	給水人口	水道普及率	給水普及率
廿日市市	110,624人	96.2%	96.8%
佐伯地域	7,094人	82.2%	83.5%
吉和地域	441人	79.7%	88.6%

資料：廿日市市水道事業給水

人口等集計 2024（令和6）年度末

<下水道普及率等>

	地域別 行政人口	処理区域 内人口	処理区域 内世帯数	人口 普及率	備考
廿日市市	114,976人	76,926人	36,001世帯	66.91%	
佐伯処理区	8,632人	2,520人	1,316世帯	29.19%	特定環境保全公共下水道
吉和处理区	553人	529人	297世帯	95.66%	特定環境保全公共下水道
浅原地区	504人	445人	253世帯	88.29%	農業集落排水事業

資料：廿日市市下水道経営課・下水道建設課調べ 2024（令和6）年度末